

聖書と論語

田

193-Ta18ウ



1200500728669

吉郎著

193
18



始



1931
TA 18



田川大吉郎著

聖書と論語

教
文
館



943

148

本書は一時に書き上げたものでない、長い間に亘り、その時々で、或は、談話そのままにつゞり、或は、口語式の文體に——であるといふ式の——つゞり、それも、書き上げたものもあつた書き上げなかつたものもあつた、區々にして、貯へ込んでゐたのを、輯録したものである。輯録に當つては、その難駁、不整理のところ、手を入れ、幾分か、統一して、読み易く、解し易く爲したつもりであるが、尙その到らぬところの方々に在ることは、どうぞ、御寛免下さい。

第一に、同一の資料を二三度くり返して用ゐた所がある。異なつた角度から、また、異なつた角度に向つて論議するとき、これは、何うも已むを得ないことである、これは、私の、整理未精に因る點もあるけれど、私としては、讀者諸君の御高察に訴へ、私が、その一句を、方々の面から考へたことを諒して、大目に見ていただきたいのである。

第二に、それにしても、長年かゝつて、考へてゐた問題だと言ひつゝ、やつと、これだけの

ものを書いたに止まり、これ以上のものを書き得なかつたことはただ残念である。私は、顧みて吾が不學と不文を恥づるのである。

第三、聖書と論語、儒學と基督教は、重要な對照である。これに關しては、もつと早く、いろ／＼の書が出来べきであると私は思つた。友人にすゝめたことも幾回かあつたのである。今回の輯録に當つては、自ら足らざることを悔ひた點が一二に止まらなかつた。これは、もつと大きな書、せめては、本書の倍ぐらゐの書を作るものとして、初めから其の積りでかゝるべきであつたと思つたのである。その様に、不備のかど／＼、思ひ及びながらこれを略した點があるのである。友人諸君の中には、この邊の同好の諸氏もあられる。どうか、進んで大成して下さいたいものである。

第四、今さら論語、孔子を説くといふことがあるものか、孔子、論語は、支那に於て已に棄てられた書でないかと貶せらるゝ人もあらう。然しながら、否、

論語は死すべき書でない、孔子は死すべき人でない。

想ふに、世界各國の政治は、今後、道義の方面に向つて一大轉回するであらう。それが、方

々に仄見えて來た、別して、東洋から考へて西洋へ、それを鼓吹し啓導せねばなるまい。孔子は古今第一の哲人政治家であつた。哲理的政治學者であつた。彼はその理論家たる學者と、實際家たる政治家との兩面を兼ね備へてゐた。その道義を基とした政治理論と術策とは、必ず今後の各國の政治に、多かれ、少かれ、寄與することになるであらう。私は、この一面からだけども、彼は、今後に生き返る、斷じて死なゝいと思ふ者である。

第五、聖書に就ては言ふべき必要は更でない、その各國の言語に譯せられたもの已に千四十二種(昭和十五年現在)に、文字あつて以來の驚異的盛事である。これに對する日本の好尚は、決して良好とは謂へないのであるが、それでも年々の賣れ行き、分冊せられた小冊子を加へて總合すれば、よく百萬部以上にのぼるといふ、されば、日本に於ても亦他を超越した異數の賣れ行を示して居るものである。聖書の頒布、普及、傳道の發達は、今後、年一年に、盛んになるに相違ない。乃ち、如何にして、その國土の風格に叶はしめ、また、如何なる部分をその民族性の高下に照して強調に差等を設くるかの問題あるのみであらう。

私は、斯の如く思ふて、基督教の興廢に希望を抱いて居る。同時に、國家の振肅、強化、整

調に關しては、孔子の任ぜらるゝ所が重い、一方は信仰の主、一方は道義の主、世界は鶴首して待つ、相駢んで文化の將來に寄與せらるゝ所が各々多からうと信するのである。

昭和十七年三月下旬

著 者

聖書と論語

目 次

第一 聖書と論語……………	一
第二 山上の垂訓と孝經……………	三
第三 孝經と山上の垂訓……………	三
第四 孔子の天と基督の父……………	五
第五 死んで復た生く……………	六
第六 斯の世の國と天上の國との間……………	八
第七 結婚に關して……………	九
第八 順な説き方と逆な説き方……………	一〇
第九 大いなる者は役はるゝ者……………	一三

第十	クリストの生涯に關して……………	一三
第十一	孔子の政治論……………	一四〇
第十二	孔子の位地……………	一五二
第十三	基督の特絶の位地……………	一六六
第十四	仁と忠と恕……………	一八二
	道と眞理と生命……………	
第十五	反抗と諫諍……………	一九九
第十六	東海の樂土を頌す……………	二二
第十七	見ゆる業績と見えざる魂……………	三五

第一 聖書と論語

引



明治四十三年三月十二日、丸の内有樂座に基督教の演説會が催された。

座は、その頃、著名の講演會場であつた(演劇なども催され料理店もあつた)。演説會は、

蓋、當時の基督教各派協同の催しであつたと記憶する。

本文は、その時、私が演説したものの大意である。その覺書が尙手許に存してゐたのを、見出し、それを本として、當時に語り添へたとおぼろげに記憶するところのものを補叙したのである。

その時、私の前席には井深博士が話をされ、博士に割當てられた時間よりも短く、七八分間をあまして終られたので、そして、私に向つては、時間をあまして置いたのだから、合せ

て、充分に語れよと勵まされたのである。

それ故、私は、約三十分間は語れるものと思つて話しを進めた所、司會者は、私に割當の

時間が既に過ぎたと、ベルを鳴して注意をしたので、私は、已むなく、述べ終らずして壇を下つたのであつた。(つゞけてやるべしと叫んだ者もあつたけれど、私は、顧みずして去つた)

司會者は、熊野雄七といふ日基派の長老で、同郷の先輩であつた。聖書と論語といふ演題は、實は彼が擇んで私に與へたのであつた。

顧みれば已に三十年の昔になる。そして、井深博士も、熊野氏も、共に已に彼世の人となられた。

—

今や、儒學復興の時代である。本日は、聖書と論語とをならべ、その不同の點に就て私の所見を一言いたしたい。勿論、詳しく語ることは出来ない、たゞ、その一斑を述ぶるまでである。大體に於て、歐米人の生活には、聖書の思想がある。それと離れざる關係がある。その如く東洋人殊に支那人の生活には、論語の思想がある。それと離れざる關係がある。流れに遡つて進めば、自然に、その源に達するので、その源は即ち誰の目にも明かな、歐米の思想の祖はク

リスト、東洋の思想の祖は孔子である。

私は、クリストの弟子であつて、不敏ながらも、クリスト教を信する者の一人であるが、それ故に、私は儒教を棄て去つた者ではない。私は、子供の時分に早く孔子の弟子となつたからその思想は深く沁み込んで居り、今も尙孔子の弟子だと信じて居る。それ故私は、クリスト教を信じつゝも、常に、孔子を先生と呼んで居るのである。私は、孔子の弟子でありながら、クリストを師父と仰ぐ者で、クリスト教を信じながら孔子の教へを尊奉する者である。従つてその教へには互に共通するところがあり、いづれも、人生の根本に關し、相待つて、その深さ、高さ、廣さを闡明し、いつまでも、その生成、發展に資するものと尊崇して居るのである。

二

クリストが、旅路の馬槽の中に生み落され給ふたことは、いろ／＼の角度から見ても、意味の深いことと感ぜらるゝのであるが、孔子の母も亦黒帝の夢に感じて、孔子を孕まれ、桑林の野に孔子を生み落されたといふことになつて居る、双方とも神秘の事蹟といふべきである。

クリストの父は、大工、その後の生活に照しても、クリストが貧乏の間に育たれたことが想

ひ知られる。それに對して、孔子の家は、さほど、貧乏ではなかつたらしい。寧ろ、中流以上の生活者であつたらしい。クリストの周圍に集まつた者は、いづれも時の下層階級ばかりで、主なる弟子は、概して文盲の漁夫等であつたが、孔子の周圍に集まつた者は、いづれも學問に志ざしのある、餘裕のある家庭の子弟であつた。所謂有産者の階級、支那では、有産者でなければ、學問することを許されないのである、當時からさうであつた、今でもさうである。

兩者の間の、この相違は、兩者の全使命の相違を本質的に豫表したものと謂へる。クリストは、萬人を對象としての宗教を説かれた、孔子は、少數者を相手としての道德を説かれた、——孔子は、神を知られなかつた。神に禱られなかつたと私は申さない。私は、孔子にも宗教があつたと思ふて居る者である。けれどもそれは他の場合に譲る——たゞ、それ萬人を對手の宗教であるから、クリストは、貧民を友とせられたのである。貧民を友とし、萬人を對手としなければ宗教は成り立たないのである。たゞ、それ、少數を相手としての道德であるから孔子は、上流階級、治者階級を相手として交はられ、いはゆる上の徳は風である。下の徳は草である。上の風が吹けば、草はその風に靡き伏する。孔子は、上の力、上の徳を以て、下の民を風靡せ

んと期せられたのである。勿論、生民の幸福を進め、人生の淨化を期せられた點は、兩者同一であつたが、然しながら一方は平等的で、一方は階級的で、一方は普遍的で、一方は差別的で、此の如く懸隔した相違があつたのである。

一例を擧げて見る。

束脩を納めた者には誨へる

束脩を納めない者には誨へない

と、孔子は言はれた。孔子は弟子を取るのに、束脩を一つの要件とせられた。今日の學校と同じことである。クリストはそんなことを言はれず、誰でも來れ、幼な兒も來れ、若い者も來れ、おちいさんも來れ、婆さんも來れ、病人も來れ、すべて重荷を荷ふて難んで居る者は皆來れと、誰をも、彼をも、貧富貴賤、無差別に迎へ入れて、一樣に教へられたのである。

且、その間に更に一つの大なる相違は、クリストは、神の國を説き、斯の世の國を説かれなかつたに對し、孔子は、専ら斯の世の國を説かれ、神の國を説かれず、且、未だ能く人に事へない、何うして能く

神に事へるか

未だ生を知らない、何うして

死を知るか

と、死生のこと、靈界のこと、未來のことは、すべて、これを他日に譲り、一般の弟子達のそれに觸れて思索するのを許されなかつたのである。言ひ換ゆれば、クリストは、斯の世の政治を説かれなかつたのに對し、孔子は、専念にそれのみを説かれたのである。孔子の學問は則ち専ら治國平天下の學問であつた。

それ故に、クリストの弟子達は、終始、貧乏であつた。たましく、金を持つた一人のユダは逆心を起して、クリストを賣つて、縊れて死んだ。その外には、一人も富に志ざした者はなかつたやうに思はれる。まして、役人に志ざした者は全く無かつたのであるが、孔子の弟子は、これに反して、

三年學んで、祿のことを言はない者は稀である

と孔子が嘆かれたほど、孔子の門下生には、祿に志さず者が多く、殆んど残らずが祿に志ざした。それだけ、軍人となつた者があり、外交家となつた者もあり、家老となつた者があり、會計吏となつた者があり、それ／＼其の方面に志を成すことを得た。そして金持になつた者も尠くなかつたといふ。

クリストは僅に三十三歳、短命にして終られた。孔子は七十三歳、頗る長命を保たれた。孔子は、

吾れ十有五にして學に志ざし、三十にして、立ち、四十にして惑はず、五十にして天命を知り、六十にして耳順ひ、七十にして心の欲する所に従つても矩を踰へない

と曰はれた。それだけ孔子の學問は七十にして漸く成つたのである。孔子には七十歳の長壽が必要であつた。クリストは、三十にして傳道に着手し、僅か三年にして、弟子達は早くも地の鹽となり、世の光りとなり、一廉の働き人となつた。クリストには長命の必要がなかつた。短命にて足りたのである。

兩者の教へ方の相違に就て考へる。クリストと孔子の、教へられ方には、その態度にも、方針にも、自然に多大の相違があつた。孔子は、

己れの欲せざる所は

人に施す勿れ

と言はれた。それに對し、クリストは、

己れ人にせられんと欲ふ如く

人にもその如くせよ

と言はれた。

一方は、己れの欲しない所はと教へ、一方は己れの欲する所はと教へ、その教への立て方に否定と肯定との兩極の差があつた。

一方は、そんなことは、他人にもするなと教へ、一方は、その通り、他人にもせよと教へ、その態度の構へに、消極と積極との兩端の差があつた。

私は、この點に、多大の興味を感じ、僅に此の一兩句、此の一端だけで、兩者の教へ方の相

違、教への相違が解ると思つたのである。尤も、これは、たゞ、その教へ方の相違を比較したのであつて、その長短優劣を比較したのでない。人生には積極のいゝ場合もあり、消極のいゝ場合もあり、孰れを擇ぶかは、時の宜しきに從ふべき筈、一概に可否を論ずべきでない。

が、私は、こゝに西洋人と、東洋人との、氣象、性格の上の相違もある。少くともその傾向がある。西洋人は概して積極的で、然りと否とを、明かに言ひ、東洋人は概して消極的で、然りと否とを、はつきり言はない傾向があると思ふて居るのである。

それから孔子は、禮儀のことをやかましく言はれた。

禮儀三千、威儀三百

しづかに聽いて見れば、如何にもその通りであるけれど、禮儀のことを、斯の如く細かに、斯の如く嚴正に説かれた人は、怕らく古今東西に孔子がその第一人者であられる。外にその比が無いだらうと思ふ。又、その筈である。孔子は、禮を以て國を治めんとせられたお方だからと思ふ。

能く禮讓を以てすれば

國を治むるに

何かあらん(國は難なく治まるといふ意味、孔子に従へば、治道は禮に盡くるのである)
その反語として

若し禮讓を以てしなければ

國は治まらない

禮を何うするぞと

禮を重んずべきことを懇切に説かれたのである。

そこで、その意味を更に論じ詰めて

禮にあらざれば視る勿れ、禮にあらざれば聴く勿れ、禮にあらざれば言ふ勿れ、禮にあらざれば動く勿れ

と教へ、これを能く守ることが仁だ、仁は即ち孔子の教への極致であると、教へられたのである。

クリストは、その禮を、一向、説かれなかつた。禮は、外面を飾るものである。クリストは

外面よりも内心を重んじ、専ら内心のことを説かれた。そこで、外面、形式の論者を罵しつて

白く塗りたる墓の如し

外は美しく見ゆれども

内は骸骨と諸々の汚れに充つ

と戒められた。その通り、世には、外面だけを美しく塗り立て飾り立て、内心には骸骨と腐肉に満ちたものが多いのである。クリストは、世間に滔々の流れであるその流の陋習を排して、外よりも内、專一にその内心を正しうせよと説かれたのである。それに全力を盡されたのである。孔子もそれに異論はない。だから、禮の外に、樂を説き、禮は外を治むる所以、樂は内を安んずる所以、樂を播して之を安んずると説かれたのである。が、クリストの教へは、それよりも一層切に、外よりも内、

人若し婦人を見て色情を起した者は、中心既に姦淫したのである。

クリストの教へは、常に、この淵子であつた。それには辛辣、骨を刺すものがあつた。當時の弟子達は、クリストの恩愛、春風の如き温かさや和らかさを感じた一面にも、流石に、この辛

刻さの一面には恐れを抱いたことであつたらうと私は想像する。弟子達ですらさうであつた。まして一般人をや、クリストが、内心に重きを置いて、外面の形式を顧みず、一世を啓導せんとせられた方針こそは、反つて一世の憤激を招いて、あの最後の禍ひを招かれたのでなかつたらうかと私は想像する程である。

且、孔子の法は道德の法である。道德の法は人の法である。勿論、人を憚らねばならない。自ら反して直くんば千萬人といへども我れ往かんと孟子のいふた如き態度は、寧ろ極端の例外であつて、普通は、靡かねばならないし、従はねばならないし、他人の思ふ所、是とする所、肯づく所に、氣兼、遠慮をしなければならぬと、すべて他人が本位である。世間が本位である。従つて、社會の感情が本位であり、その常識が常理となり、通則となる。それが、孔子の教への全體であつたと認めらるゝのである。

クリストの教へは、宗教である。専ら、宗教を説かれたのであるから、即ち専ら神を崇めんことを教へ、一切の權威を神に歸して、神の法を説かれた。そして、毫末も人の法を説かれなかつた。繰返して申す、孔子は人を説かれたのである。神を説かれなかつた。クリストは神を

説かれたのである。人を説かれなかつた、人に關しては、たゞ、神に事ふる人の心得を説かれた、態度を説かれた、道を説かれた、責任を説かれた、使命を説かれた、たゞ、それだけである。人と國との關係を力説されなかつた。國と國との關係を説かれなかつた。従つて政治を説かれなかつた、外交を説かれなかつた、軍事を説かれなかつた。非常な相違である。全く懸け離れてゐたのである。

然らば、クリストは、その神を何う説かれたかといへば、それは、極めて簡單に明瞭であつた。

神は靈なれば

靈と眞を以て拜すべきである

神は靈である。目に見えざる力である。生命である。強ひて求むれば光りである。光りの如き力である。生命である。それを形あるものとして見んとすることは誤りである。違ひである形の外に、形の上に求めよとの教へである。革命である。従來の思想と習慣とに對する根本的革命である。一世が怖れて、いきり立つた所以、然しながら、

眞の禮拜者の

靈と眞をもて父を拜する時きたらん

神は父である。父なる温かさ、親しさ、懐かし味を有し給ふお方である。そして

父は斯の如く拜する者を求めたまふ

その通りである。吾等は神を拜する如く父を拜せねばならぬ。父を愛する如く神を愛せねばならぬ。神の性質は、こゝに至つて、吾れ等人類に、世界の人類、一概に、舊來の觀念を一變せしむるに至つた。それ以前の神は、もつと、嚴そかなお方であられた。もつと遠いお方であられた。有るか無いか、糺糊として分らないお方であられた。それ以來は、ずんと懐かしいお方となられた。父の如き母の如きお方となられた。そして父の靈の如く、母の魂の如く、いつも吾等の側に、吾等の中に、吾等の上に、凜として存在し給ふ現實の力となられた。

そして、極めて不思議なことには、主として國のことを説き、國と臣民との關係を説き、君臣、夫婦、兄弟、五倫のことを説かれた孔子の教へよりも、専ら、神のこと、神と人との關係を説かれたクリストの教への方が、反つて吾等の實際に近かつたのである。これは、頗る不思議なこと、この一節のことを次に論じて、私の、今日のお話を結ぶことに致して置きたい。

四

時間が迫りましたから、急ぎます、多くは御存知のこと、詳しく述ぶる必要もないものでせうし、後でゆる／＼とお考へ下さい。

先づ、論語には、子供の話がありますか、無いでせう、無いといふてもいいでせう。

聖書には、それがある。

幼な兒を我に來らせよ

改まりて幼兒の如くならずば

天國に入ることを得じ

聖書には幼兒の話が、全篇を貫いて輝いてゐます。

二、論語には婦人の話がありますか、ありますまい、孔子が、奥さん、子供達と、家庭の和やかな暮しをされた圖は、一ヶ所も論語の中には描かれてゐません。聖書にはそれがある。クリストは、獨身のお方、妻子の團樂の會は、勿論、無かつたけれど、婦人の間に、子供の間に

賑やかに暮された様子が、よく、寫されてある。現に、クリストの神に關する根本の教へは、サマリヤの水汲み女との問答のところに傳へられて居る。

三、論語には貧乏の話、生活の話、米の話、魚の話がありますか、ありますまい。尤も、顔淵の貧乏の話はある。

一簞の食、一瓢の飲、

陋巷に在つて

其の樂みを改めない

顔淵といふ人は、ゑらい人であつた、が、論語の中には、生活の話は少いでせう。殆んど無いといつてもいいでせう、然しながら貧乏は人生の普通の現象です、人生は貧乏のある所に在る貧乏のない所には人生はない、私は人生即ち貧乏と見てゐます。勿論、金持はある、が、それは少數でせう。例外でせう。一般は足らず、欲する所を充し得ないで暮して居るものでせう。孔子さんは、それを、何う御覽になつたのか、貧乏に關する話と事實が、論語には出てゐません。それだけ論語の生活は私どもに縁の遠い感じがします。

聖書には、それが澤山出て居る。生活の話に、パンの話、臺所の話、食卓の話、もてなしの話、孔子にも陳蔡の間に餓へられた記事はあるが、クリストには、無花果の下にかけよつて、熟した實のないのに弱られた記事がある、弟子達が、麥菴を過ぐるとき、

穂をつみ取つて、手にて揉みつゝ食つた

といふ事もある。無論、咎められた。彼等の餓へてゐた様子が察せられる。それに止まらない彼等の不足がちであつた、世の常の、或は、世の常以上の貧乏であつた生活の状態が察せられる同時に、その頃の社會の状態が察せられる。聖書は、人生の實際をそのままに描いた記録である。それだけ、それは、私どもの現實に近い。

四、論語には、労働といふことがありますか、人は皆、汗して働くべきものである。それで漸く暮して居るのである。その労働者の生活の状態が、論語の中にありますか、無いでせう。

聖書の中にはそれがある。働いた時間が長かつたとか、短かつたとか、それに、賃銀が多かつたとか、少なかつたとか、今日にある資本家と労働者の對立と反抗、兩者の間に、人情があるか、温情があるか、相依の關係が理解されてゐたか、ゐなかつたかといふ如き實際の問題

が皆現れて居る、讀めば讀むほど聖書は實際の書である。

五、病氣は何うです、病氣も人生に普通の狀相である。凡そ、人間の住するところには必ず病氣がある。或は、病氣をしない人間が稀に有るかも知れぬ、病氣のない社會といふものは曾て有りません。そして、論語には、それが、どう説いてありますか、どう取り扱はれてゐますか、

伯牛、疾ひあり、

孔子は、これを訪問され、

窓からその手を執つて慰められ

命なるかな

斯の人にして斯の疾ひあり

と嘆ぜられた記事がある。さも、あるべき事であつた。

聖書には、その記事が、さらにある。クリストの、救世の運動は、病氣の治療のことから始まつたと申してさへ殆んど差支へないほどである。それほどに、病氣の記事が聖書の中には多

い。現に、日本に來られた宣教師の中には醫業に通じた人が割合に多くゐられ、宣教師に由つて建てられた病院も一二ヶ所どころでない。病氣とクリストの教へとは、密接にして、離れられない關係の如くなつて居る。それだけ、聖書の記事は、吾等の實際生活に近いわけである。

右凡そ五點、他のことは略するとしませう。クリストは宗教を説き、孔子は倫理、五常、吾等關係のある實際のことを説かれたのに、その孔子の引用された材料の中には、病氣の惱みがなく、貧乏の苦しみがなく、労働のことがなく、子供や、婦人や、臺所や、生活上の問題がなくして、クリストの引用された材料は、概して、それらのことばかり、吾等の日常生活の有様が、有りのまゝ、漏さず、取り入れてあつたといふは、いかにも不思議な次第で、實に稀らしい對照であつたと思ふのであります。

そこで、私は、この一段の結論として、

甲、孔子流の學問は、もつとく、人生の實際に近づかすべきである。それを近づかせないでは、吾等の本當の倫理生活のことは考へられない。孔子が、倫理生活のことを、力を籠めて教へて下さつたのは有り難いが、その倫理生活を完ふする爲には、吾等は、もつと、貧、

病、難、苦の實際の有様を知らねばならぬ。人生の實際の有様は、論語に示された以上に、或は、それ以下に、難儀と、苦痛と、矛盾と、荆棘に満ちて居ると思ひます。

乙、クリストに由つて、吾等は、神と人との關係が、存外近いことを知つた。神は、吾等の病氣と、貧乏と、難儀との中に一緒に在るのである。クリスト以前、吾等は、神を、目に見えない程の遠い存在と思ふてゐた。クリスト以後、吾等は、神を、吾等の右にも、吾等の前にも、吾等の中にも、どこにでも在る存在と思ふことになつた。それだから見えさせ給はないのである。見ゆるものには形がある、形のあるものには、一定の所在がある。どこにでも往返自在、融通無碍といふ譯に參らない、往返自在、融通無碍、どこにでも存在し得るものは、形のないこと空氣の如きものに限る。神は空氣の如きものである。空氣は人間の生命の素であり、生活に缺くべからざる糧であるが、然しながらその存在は目に見えず、手につかぬない、神とは斯の如きものであると、聖書は告げたのである。

五

もはや、結論を語るまでもあるまい、

が、念のために一言する。

私は、聖書の信者であるが、同時に、論語の信用である。

論語は、神のこと、天のこと、靈魂のこと、死のことを語らなかつたが、聖書は、それを、略ぼ明かに私に告げてくれた。

論語は、國のこと、君のこと、父母のこと、祭りのこと等を教へてくれたが、クリストは、それらの多くを略して、たゞ、弟子達の自解と、自得に任された。

私は、目に見ゆる斯の世の務めを、今まで通り、論語に學んで、目に見えない後の世のことに神の國のことを聖書に學びたいと思ふ。斯くして、神の國のことを聖書に學ぶことは、決して斯の世のことを疎そかにする譯にはならない。論語に従つて、斯の世の務めを果すことは、能く神の國に至る備へを爲すものである。論語に従つて、能く斯の世の務めを果した者は、矢張り神の國にも至り得るのである。それだけ論語の人の道は聖書の神の國への道に通ずる所がある。たゞ、論語はその神の國のことを語らなかつたのを、聖書は鮮かに説いて居るのである。宗教に對する要求は、人間の自然の性情、根底は深い。吾等は、嬰兒が母の乳房を求むる如く

に、神の國を求めて居る。そして、聖書はそれを與へたのである。

第二 山上の垂訓と孝經

山上の垂訓と孝經とは、古今無類の對差である。一方は、天上の國を説いて、一方は、地上の國を説いて居る。地上の國には結婚があるが、天上の國には、結婚はないものだ相で、基督は、別のところに引抄した如く、嫁がず、娶らず、夫婦は存在しないものと語つて居られるが孔子は教への基礎をその結婚に置くほどに、それに重きを置いて、結婚を以て人生の最大の禮儀と爲し、親子、夫婦は、人倫の大本であるぞと述べて居られる。(本書中にも他の所にその結婚のことを述べて居る)。

それだけ、兩者の教への建て方は背馳して居る。私は、そこに盡きざる滋味を感じる者である。想ふに、他にも同感の士が多からう。加之、孔子の説き方は、諄々として、春風駘蕩であり、基督の説き方は、秋霜烈日の如く、喩へば、骨をえぐり、肉を切り、血を見ねば已まない底の峻烈な論法であつて、人をして驚心駭目せしむるところのものが多し。斯の世以上の説き方と謂ふべきものであらう、私としては、滔々胸を刺さるゝ思ひをし、幾たびも顔を背けたい感じをしたが、その都度反つて親愛の情にも打たれて今日に至つた、誠に不思議な訓へである。

山上の垂訓と、孝經とは、何も基督と孔子の教への代表的大作と見るべきものではないが、然しながら何人もこれに親しんで、そして、基督と孔子とが、共に、自發的に、自説を高調せられた。まとまつた——ちぎれ／＼でない——雄篇である。この意味に於て、代表的と申しても可なる程のものと思ふ。

かた／＼、私は、この兩篇を駢べてこゝに語ることの效果と興味とを感じたのである。

二

基督は、全く、天上の國を説くために來られたお方であらう。終始、そのお話を爲された。然しながら、天上の國は、顯はに、明らさまに説けないものであらうから、多く、喩へをもて語り給ふた。

弟子たち來りて言ふ「何故に譬へにて彼等に語り給ふか

汝等は天國の奥義を知るところを許されたれど、彼等は許されず（馬太傳第十三章）

然し、それは、果して彼等にだけであつたらうか、弟子達には、譬喩に由らず、率直に、明白に説き示されたものであつたらうかといふに、必ずしも然らず、

我、これらの事を比喩にて語りたりしがまた、比喩にて語らず、明白に父のことを汝等に告ぐるとき來らん（約翰傳第十六章）

と言はれた、見るべし、弟子達にも亦常に比喩をもて語り給ひたることを、弟子達も亦申した。

視よ、今は明白に語りて聊かも比喩をいひ給はず（同前）

これは、言ふまでもなく、基督の死に臨み給ふた直前のことである。その頃までは、終始、比喩をもて語り給ふたのである。如何なる比喩を用ひ給ふたかといへば、

「天國は良き種を畑にまく人の如し

「天國は一粒の芥種のごとし

「天國はパン種の如し

ものゝ、生長、發展の力の、無限に盛んなことを示し給ふたものであらう。尙

「天國は畑にかくれたる寶の如し

「また天國は良き眞珠を求むる商人の如し

「また天國は、海におろして、各様のものを集むる網の如し（馬太傳第十三章）

吾々をも、残らず引き上げんとし、大手をひろげ、待ち構へてゐ給ふといふ意味にも聞へる更に

「天國は、勞働人を葡萄園に雇ふために、朝早く出でたる主人のごとし（馬太傳第二十章）

「天國は己が子のために婚筵を設くる王のごとし（馬太傳第二十二章）

もろく、斯の如く、殆んどすべては、比喩をもて語られたのである。何うしても、霞を隔て、山を見るが如く、明白ならざる感じが、何人にも免れないところであらう。

楮、山上の垂訓は、基督の初段の教へである。さらりと入門するか、否か、いろはの手ほどきの所である。たとへ、一大雄篇といへども、説いて詳かならざるものゝあるは、當然の事理

とも謂へる。天國とは何ういふ所かといふ解釋の、こゝにて私に會得できなかつたのは、必ずしも私の不明不徳のためだけではなかつたと思ふ。

けれども、私は、山上の垂訓に於て、略ぼ、次の如き理解を得た。

三

山上の垂訓は、馬太傳の第五章から七章まで、三章に亘つた長篇の説教であり、論告であり指針であるが、天國に關する要旨は、第五章の三節から十二節に至る、九節の間、或は、十一節に至る八節の間に概示せられたものであらう。

この數節がその要旨である。その本幹である。それ以後は、それに至らんとする者の心得の條件である。その方針である。それ以後のところにも、貴い教へは、珠玉の如く輝いて居る、が、それは、要するに、幹につらなる枝である。源から落ち來る流れである。私は、その本幹たる第三節から第十一節のところを、先づよく吞み込まねばならないと思ふた。それは短いから、全部を掲ぐるもいゝが、全部を掲ぐるに及ぶまい、第一句

幸福なるかな、心の貧しき者、天國はその人のものなり

とある、天國は解らない、けれども、天國に居り得る者の人柄は大凡解る。心が貧しければいゝのである。心の貧しき者は即ち天國に入り得るといふ、天國に迎へらるゝといふ、その様の人に取つて、天國は、近い、それは、遠くて、見えない、懸け離れた所といふことになしに、近く現前に在るのである。現在の世がそれである。勿論、未來もあらう、然しながら未來だけが天國でない。天國は現に斯の世にも在るのである。その貧しい心の天地が即ちそれなのである。これは有り難いことだと私は感動した。が、その貧しい心の境地に私は入り得るか、何うか、それは、入り得べきやうにして、なか／＼、入り難い境地でないかと私は省みて畏れた。

第八節

幸福なるかな、心の清き者、その人は神を見ん

とある。この心の清き者とは、心の貧しきが上に且清き者を謂ふのであらう。貧しいけれどもそこに自縮してとゞまらない。尙昇らん／＼と求むる心がある。それが清らかにして、一點の邪氣を含まないことを指したのであらう。その人は神を見得るといふ、成る程、さうであらう忝じけないことだと感謝した、それに引き立てられた、第十節

幸福なるかな、義のために責められたる者、天國はその人のものなり

とある。如何なる人々を、義のために責められる人といふかは、問題であらうけれど、天國はその義人達に属するのである。義のために苦められた人達は、當然に、天國に迎へられて慰めらるゝのである。して見れば、天國の姿は、彷彿として察せられることであると想はせられた。

これだけで、急いで斷定を下してはならないが、私は、これらの邊を考へて、往きつ、戻りつする時、何といふ高い教へであらう。孔子の教へには無いところのものがある。孔子の教へは地上の事のみを説いたのであるから、自然と、そこに、多大の懸隔を覚える。人倫の教へとして、孔子の教へは、輕視してはならない、何日になつても、重んぜられなければならないこと勿論であるけれど、然しながら、地上をおどり越へて、天上に迫らんとする斯の教へ、地上の者にも、天上の者の心得方を、早く、この世ながらに體得せしめんとする、この基督の教へにも、吾等が、この世ながらに、これを、探究しなければならない眞理の道が備へられたのである。と、私は、心から基督の教へを崇め敬ふことになつたのである。

四

然しながら、山上の垂訓の、次の數節を、吾等の今日の生活に關するものとして考へれば、また別様の感じが泛ぶ、

この故に明日のことを思ひ煩ふな、明日は明日みづから思ひ煩はん

一日の苦勞は一日にて足れり(馬太傳第六章)

吾等の地上の生活は、この様にして、果して差支へなく暮せるものであらうか、若しさうなら、仕合せであるかも知れないが、實際に於て果して斯く晏閑たり得べきものであらうか、基督はその道理を教へて、

この故に我れ汝等に告ぐ、

何を食ひ何を飲まんと生命のことを思ひ煩ひ、何を著んと體のことを思ひ煩ふな

空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に收めず

然るに汝等の天の父はこれを養ひ給ふ、汝らはこれよりも遙に優れるものならずや

と申されたのである。それは、如何にもその通りである。人は、何人も、自分を以て鳥に如かないとは思はない。けれども、それ故に、吾等は、播かず、刈らず、倉に收めず、貯へない

でもいゝとも思ふまい。反對に、吾等が、播き、刈り、收め、貯へることこそは、吾等の鳥、けものの類にも優つて、萬物の靈長たる所以であるとさへ解して居るのであらう。

それ故に、山上の垂訓のこの邊のところ

野の百合は如何にして育つかを思へ、勞せず、紡かざるなり、されど、我れ汝等に告ぐ、榮華を極めたるソロモンだに、その服装ひこの花の一つに及かざりき

と、基督が容ちを正うして、嚴肅に教へ給ふたところは、誰しも、感嘆して一辭を加へ得ず、古今の絶唱と仰いで居るところであるけれど、孔子は、これに反して、

國家には三年の貯へが必要である。三年の糧を貯へてゐないものは、國家として必要の備へを備へてゐないものだ

と詰責せられたことがある。その如く、人生には、貯蓄が必要と爲されて居る。この實際の事實に照して、私は、基督のこの邊の教へに惑はざるを得なかつた。それは、私が、あまりに斯の世の事情に囚はれ過ぎてゐたためであらうか。

たゞ、次のことは明かに認め得た。

(一)天國に入る者は、一切の慾得の心を思ひ絶たねばならぬ、(二)天國は、全然、その様の心配のないところである、(三)それ故に、多く取つて、多く蓄へやうとする斯の世の心の習ひでは、天國には住へない、住へないのみか、入らしめていたゞけない、(四)心を貧しうせよ、また、清くせよ、必要とあれば、有てるもの一切をさゞけて、他のものゝ必要に供給せよ、その様の心がけある者のみ天國に入らしめていたゞける、それでこそ天國の生活に慣れ得るのであるから、地上に於ても、あらかじめ其の心せよ、(五)鳥が紡がずして着、百合が勞せずして花さくそれらを見ても、以て天國の豊富さを想ひ知るべきである、(六)一日の苦勞は一日にて足れり、斯の世に於て彼の世の後までの富を蓄へんとするなどは全く無用の沙汰であると

私は、略ぼ、この様の解を爲した、その後、従軍するに至つて——日清、日露の役——私は戰場を天國の如く解するに至つた、天國の一部は、戰場——或は平時の兵營——に現れて居るものと思ふに至つたのである。

と申すわけは、戰場は——乃ち軍隊生活の兵營は——生活の心配のない所である。食物も、被服も、宿舍も皆國家の支給であり、それは一定せられて居るのであるから、外に對する何等

の慾望の感がない、生活の必要料は、糧と共に足りて居る。そして、その上の慾情を刺激する市場なるものは存しない。心が淡泊になる筈である。無慾になる筈である。清純になる筈である。高尚になる筈である。純粹にして無垢、一點の污垢をとゞめない筈である。それが戰場である。それが天國であると思つた。戰場に於ては、たゞ國、君に奉仕するばかりである。天國に於てはたゞ、父なる神に奉仕するばかりである。二つのもの一、何人の心神も清くして貧しい。

五

基督の教への辛酸極まる刺激に關しても尙一言して置かねばなるまい。山上の垂訓にその趣が現れて居る。

「姦淫するなかれ」と云へることを汝等きけり

されど我は汝等に告ぐ、すべて色情を懷きて女を見るものは、既に心のうち姦淫したるなり

とある。私は、成程と深く感心した。同時に、天下一人の姦淫しない者は有り得ないだらうと

感じた(色情を懷きてと言はれたところを、細かく穿鑿すべきわけであるけれど)

次で、

もし右の目汝を躓かせば、抉り出して棄てよ、五體の一つ亡びて、全身ゲヘナに投げ入れられぬは益なり

もし右の手汝を躓かせば、切りて棄てよ、五體の一つ亡びて、全身ゲヘナに往かぬは益なり

とある。道理はその通りだと首肯出来るが、さて、實際に、さう實行することが出来るかの一段となれば、頭を振らざるを得まい、それは、私一人でなからう。

汝を訟へて下衣を取らんとする者には上衣をも取らせよ

人もし汝に一里往くことを強ひなば共に二里ゆけ

汝に請ふ者に與へ、借らんとする者を拒むな

汝の體を愛し汝の仇を憎むべしと云へることあるを汝等きけり、されど、我は汝等に告ぐ汝等の仇を愛し、汝等を責むる者のために祈れ

何處までも高い教へである。深い教へである。昔は顔淵は、孔子の教へを評して、

之を仰げばいよ／＼高く

之を鑽ればいよ／＼堅し

之を瞻て前に在るかも忽焉として後ろに在り

既に吾が才を竭くし

立てる所あつて卓爾たるが如し

之に従はんと欲すと雖も由なきのみ

と嘆じた。私は、それ以上の嘆じを基督の教へに發せざるを得ない。

たゞ、その教へ方の、辛刻にして、峻烈無比なる、往々にして、手に一杯の汗を握つて足りざるを覚えしむる場合がある。吾等の、偷安懦弱の習ひは、いつしかに、斯くまでも辛刻の言葉を用ゐ給はねば、覺發せしめ兼ねらるゝ奈落に陥つて居たのであらう。それですら尙覺發し得ないものがあるのであらう。人は、よく／＼昏醉し、淪落したもと思はねばならない。

第三 孝經と山上の垂訓

孔子の教へは、述べて作らずと言はれた、すべてが、古人の教へを繼承して祖述せられたものであるから、基督の教への如く、奔放自在、儼然たる權威を含んだ獨創的の指示論斷の乏しい所のあるのは已むを得ない。

けれども、その教へ方は、實に、春風、慈雨の如く、愛敬に富んで居る。趣致に富んで居る指授の方法としては、頗る實際的で親切であつて、所謂百世までの模範と爲すに足るべきものであることは、言ふまでもない、そして私が、こゝの對比に、

孝經を擇んだわけは、孔子が、斯の世の國のこのみを説いて、天上の事、未來のことを言はず、成し得る限りそれらの話を避けんとせられた用意にも合ふと思ふたからであるが、それよりも、これは、孔子が曾參に向つて語りかけられた、本末、終始の連絡の整然としてまとまつた論作になつて居るからである。孔子の教へは論語一卷に盡くるとまで謂はるゝけれど、そ

それは、通篇、切れ／＼の間答であつて、多くは、弟子の方、客の方から、問ひかけ、孔子がそれらに對し、當意即妙の答へをせられた記録になつて居る。それは皆立派で、不足の廉があるとは決して申さないけれど、孝經の教へは、孔子から進んで語られたものだけに、一段と、孔子の主張、信念、その理法と心法、教法等を明かに察し得る便宜がある。

私は、この意味に於て、これを取り上げたのである。

二

先づ、仲尼、問居すとある。折柄、孔子は、何も、爲しかけられたことなく、心持いと靜かに、獨坐して居られた。

そこに、曾參が侍坐してゐたのである。

師一人、弟子一人、しかも、お氣に入りの高弟である。

その時、孔子の方から、聲をかけて、參よ、

先王に、至德要道があり、以て天下を順へとせられ、民は、そのお蔭により、よく和らいで睦まじく、上下に怨みがなかつた。汝はそれを承知して居るか

と申された、誠に、大切な機會であつた。孔子は、この時、天下國家を治むる重要な教へを曾參に指授せられたのである。それに對し、曾參は、先づ、席を下つたとある。先生に對する弟子の禮を正しうして後、申し上げた

參は、不敏、何うしてそれを承知してゐませうやと、こゝには、何うぞ、教はりたいと申上げたことになつてゐない。その句はないけれど、その意は、勿論、それを願つたのである。

私は、こゝまで掲げて、先づ、私の所感をさしはさみたいのは、基督と孔子の教へ方の態度の相違である。

山上の垂訓は、文字通り、山上に於て、野外に於ての演説である。従つてその聴衆は、八方から集まつた有象無象であつた。名の有る人もあつたらうけれど、名の無い人が多かつた。そして、基督とは、その以前に於て、何の關係も、縁故もない人達ばかりであつた。

それに對し、孔子の場合は、唯一人の相手である。多年親んだ弟子である。そして、その場所は、孔子の部屋である。そこは、必ず、掃除の行き届いた所であつたらう。奥まつた、人聲の聞えない、他の弟子達も滅多に出入しない靜肅な所であつた。

何といふ兩者の相違であるか、基督は、實に一般民衆を相手として、その宗教を大聲に疾呼し給ふたのである。私は、基督教の盛んなる國々に、演說會の盛んなことを異しと思はない、開教の祖がその如く教へ示されたのである。孔子は、擇び抜いた少數の弟子達に對してのみ語られたのである。聲を高くする必要は毫もなかつた、聲を高めずに、従つて少しも粧らずに、激せず、しんみりと、言葉少く語り給ふことが可かつた。それが、孔子の教へ給ふ普通の方式であつた。私は、東洋に於て、猛烈の將軍が、陣頭に立つて、大聲疾呼して、敵軍を披靡した事實を知つて居る。殆んど如何なる場合にも、學者論客が、大衆を相手に雄辯宏辭を揮つて聽衆の膽を奪ふたといふ事實を知らない、先生が先生である。孔子は曾てその様の演說を爲さなかつたのである。

斯くて孔子は曾參を相手に、その所謂先王の至徳要道なるものを語られた、如何なるが是れ先生の至徳要道かといへば、

夫れ孝は徳の本である

教への由つて生ずる所である

參よ、元の坐にかへれ、ゆつくり語つて聞かすぞと、先づ參を落ち着かせ給ふたのである。ゲニ、孝は百行の本と申す、孔子に従へば、一切の至徳要道の本となるものが則ち其の孝である。親に對するの孝は、同時に君に對するの忠である。それ故に、それが、天下の順にならしめた本である。天下を順にするには、先づ親に對する孝を普及せしめねばならない。それを徹底せしめねばならないと申されたのである。

山上の垂訓に對し、これは、あまりに通俗にして、近まわりの教へであると謂ふ者はあらう然しながら、眞理は常道の中に在る、孔子のこの通俗の教への中にも、極めて重要な眞理の存することを忘れてはならないのである。

三

しからば、その所謂孝行とは何であらうか、孔子の教へは至つて簡明である。

孝は、親に事ふるに始まつて（至當の言葉であるけれど申さるゝまでもないこととも申される）

君に事ふるに申し

身を立つるに終る

である。君に事ふるといふは、役人になるといふこと、孔子の弟子は、皆、士である。日本の士族階級である。乃ち上流階級である。少くとも中流以上の階級であつて、一般の民衆でない、それに、役人になれとすゝめられ、役人となることが孝行の道の央ばであると教へられたことは、無理はない、素直に領解出来る。もう少し詳しく言へば

身體髮膚、之を父母に受く、敢て毀傷せざるは孝の始めなり

とある。宜しい、その通りである。それに次いで

身を立て、道を行ひ

名を後世に揚げ

以て父母を顯はす、孝の終りなり

とある。これも、中流以上、上流階級、學問を以て身を立て、士道を以て、世に處する青年者流の一般の標準として、誰も首肯することが出来る。

そこで、孔子は、この一節の教へを結ぶに、詩經の大雅の篇を引いて

爾の祖を念ふことなからんや

厥の徳を聿べ脩む

と結んで居られる。先祖を追念するのである。そして、その徳を聿べ脩むるのである。それが孝行であると、孝行の意義が、説き出で、殊の外、簡明に直截である。

但、爾の祖が、人々の祖であることは、言ふまでもなく明かであるが、昔の大儒熊澤蕃山はこのくぐりを註釋して、それを補ひ弘め

人々の祖は、大靈、天地、先祖、父母なり

と深く遠く解して居る。そのわけは

大靈は天地を生じ、天地は先祖を生じ、先祖は父母を生じ、父母は我を生じた

天地は人の太祖なり、天地は生々を以て心とす、人は天地の心を以て心とす、故に厥の徳は孝なり、孝徳を身に脩め、人事に行ふを孝子孝孫とす

と論じて居る。この論は、或種の人々、斯の種の道を心して切實に念ふたことのない人達に取つては、或は、意外であるかも知れない、が、我が儒學の先生達は、常に、この理解、この道

理を以て、一般に推し當て、教へて來られたのである。されば、熊澤蕃山は更に申して居る。

人心の靈、父母を思はぬと云ふことなし

祖を思はぬと云ふことなし

本を思ひ、本に報ずるは孝なり、

我が性命身體、父母先祖に受けたればなり

と、孝行とは、眞の孝子とは、大凡斯の如きものである。孔子のこれを力説せられたのを、後世百千年の儒者達が、これを追賛して敢て憚らないところに、不朽の眞理があるわけである。

尤も、山上の垂訓は、一句も、これらに觸れてない。それ故に基督の教へを非難するは當らない。それでも孔子がこれを力説せられたに對し、基督が毫もこれに觸れられなかつたといふ事實は、吾等のこれを明記すべき所であらう、同時に、立ち場の相違がある。目的の相違がある。趣旨の相違がある。初めから然なつて居たのだといふことにも亦注意すべきであらう。

四

孝行の解説は略ぼ以上で盡くると思ふけれど、その趣旨精神を玩味するためには尙申し加へ

て置くべき訓へがある。

それは、天子の章と題し、天子の孝を説かれたところに（こゝに天子の章と題しと記したけれど、斯の如き各章の區別は、皆、後の學者の附け加へたもので、原論に、斯く區別してあつたのではないといふことである）

親を愛する者は敢て人を惡まない

親を敬する者は敢て人に高ぶらない

愛と敬とは親に事ふるに盡く

而して徳教百姓に加はり、四海の則となる

蓋天子の孝なり

としてあることである。孔子の教へ、支那の習ひとしては、天子の孝があり、諸侯の孝があり、役人の孝があり、平民の孝があり、帝國として國の組織が上から下へ立體的なるため、この孝行にも亦階級があつて、大小、高下、各不同である。そこで、斯の如く天子の孝といふことを第一に掲げ、天子が身を以て一般民衆の孝行の模範となられんことをすゝめられたのである。

孔子が、帝王の師とならんと志して居られたことは、改めて申すまでもない。そこで、帝王に對しても、孔子は、斯の如く孝行をすゝめ

愛と敬とは、孝行に盡くるものである、

孝行の人は、人を悪まない、人に高ぶらないもの

と訓へられたのである。流石に其の奥を究められたものと謂はなければならない。蓋、人を惡むといふこと、人に高ぶるといふことが、一切の、不平、不満、不義、不徳、悖亂、動搖の源である。それを孔子は斯く戒められたのである。孝に由つてそれを防がんとせられたのである。

基督も、この二つの不義を常に痛切に戒められた。山上の垂訓に従へば、

天の父は、その日を、悪しき者の上にも善き者の上にも昇らせ、雨を正しき者にも、正しからぬ者にも降らせ給ふなり、汝等、己れを愛する者を愛すとも何の報ひをか得べき、取税人も然するにあらずや、兄弟にのみ挨拶するも何の勝ることかある。異邦人も然するにあらずや（馬太傳第五章）

と述べて居られる。そして、

誰にでも、此の幼兒のごとく己れを卑うする者は、これ天國にて大いなる者なり（馬太傳第十八章）

と、人の誓つて慢心すまじきこと、苟しくも高ぶるまじきことを、しばしく、教へ給ふたのである。この點のごとき、兩者の教へは、完全に一致して居る。蓋、傲慢を惡み、尊大を惡み、博愛を尊び、親切を敬することは、天上の國に於ても、地上の國に於ても、もとく共通する所の徳目であるからである。それを、孔子は、

愛と敬とは、親に事ふるに盡く

と、これをも孝に本づいて教へられたのである。本當にさうだと得心せしめらるゝことである。そして、その第五章、士の孝行の章に於て（章を立てたことの蛇足なるは前に述べた通り）

父に事ふるに資して——この資を、日本語で何と讀んだらよいか、私は未だ知りません。則とつてとでも讀みませうか

以て母に事ふ、愛同じ

父に事ふるに資して以て君に事ふ、敬同じ

故に、母には其の愛を取り、君には其の敬を取る
之を兼ねる者は父なり

愛と敬との同不同、君と、父と、母との間の、愛敬の別不別の情を、この解説は、殆んど盡し得て遺憾がないものゝ如く思はれる。孔子の見解の徹底深切に嘆服する所以である。

そして、簡短なる此れら二三句の引用と解説とにより、古への明王、至徳要道を布いて、天下を順にせられたと言はれたことの、要するに、それは孝道であつた所以、孝道には、いつも斯の如き廣大無邊の盛徳が存するものである所以が、決して一片の偶語に止まらない、そこに深奥の根據が存するものであると云ふ所以が、確實に認識せらるゝと思ふのである。

五

人間に死はつきものである。立身出世が孝道の終りであるとしても、その後には必らず死がある。それを何う處置するかは、また、人生の重要な禮法、心則の一であらねばならない。

孔子は、死後の世界を語ることを、概して避けられた、未だ生を知らず、爲んぞ死を知らんと言はれた場合もあつて、死後の天地は、幽冥の天地として、妄推することを、弟子達に嚴戒

せられたものゝ如くである。然しながら、葬儀といふと、祖先の祀りといふことには、殊の外深く注意を拂はれ、反覆丁寧に教へられた、禮記に其の詳を盡してあると思ふが、孝經の中にも仔細にそれを述べられた節がある。孔子は死を輕んぜられた人でない。

聖書に由ると、或る時、弟子の一人が申した。

主よ、先づ往きて我が父を葬ることを許し給へ、と

私には、これは事實の記録だらうと思はれる。假想の話だとは思はれない。それに對して基督は申された

我に従へ、死にたる者にその死にたる者を葬らせよ

誠に意外千萬の答へである。私は、私の目を疑ふほどに驚いたが、確實にさう書いてある。孔子は、如何なる場合に於ても、斯く言はれなかつたものに相違ない。若し、斯く言はれたとき曾參はそれに従ふたであらうか、顔淵はそれに従ふたであらうか、子路はそれに従ふたであらうか、私は、皆の弟子は皆従はなかつたものと解する。實は、そんなことを若し孔子が言はれたらと思ふことあらば、邪智である、誣曲である。孔子は決してそんな無情のことを言はず、

反對に、弟子のもとに馳けつけて、哭して慟し、その弟子をいたはり、その家族を慰め、葬りのことを親切に手傳はれたであらう。それが孔子である、孔子であるのみならず、即ち人である。斯く思ふ私は基督とその弟子とのこの際の記事を、何うしても解し得ず、その初めに解し得なかつたのみならず、今にも解し得ず居る。實は、深く介意するに足らない問答だと打ち棄てて居るのである。が、基督の

「死にたる者」に

と言はれたそれに、何か格段の意義が含んでゐたものかも知れないと思ふても見た、が、要するにこれは詮索の外である。教への建て方が異なれば、この極にまで至るものかと、今更に、その建て方の相違に注意するに至つたのである。

偕、孔子の言はれたところは、祖先の祭りを孝行の中に加へて、次の如く訓へられたことになるのであらう。

孝子の親に事ふるや

居るときは則ち其の敬を致し

注意 熊澤蕃山は、この居るときはを、父母を離れて居るとき、遺體を奉じて居るときと解して居る。果してさうか、再考を要すると思ふ。

養ふときは則ち其の樂みを致し

病まれたときは則ち其の憂へを致し

表には則ち其の哀しみを致す

祭りには則ち其の嚴を致す（嚴は敬の至りと解してある）

五者備はつて然る後能く親に事ふ

と、斯く明瞭に訓へてあるのである。して見れば、祭りといふことは孝の大切な一部であるその重要部である。親を慕ふ者は自然に祭る、祭らずには居られないのである。祭りは、親を慕ひ、親を懐かしむに伴ふて起る。已むに已まれぬ人間の至情である。その發露である。誰とて、これを否認し、これをとどめしめ得べきものでない。反つて、よくこれを祭り、よくこれを達せしむることに由つて、人情の正しい進みと、その靈的な宣揚とを期し得るのである。

されば、孝經の二十二章——章のことは前に斷つて置いた通り——最後の章に於ては、親を

喪つた場合の、子の哀戚の情を記して、

三日にして食ふ（その間は喫べ得ないから喫べない、三日を過ぎてから始めて粥をたべるとある）

喪の期は三年つゞく

これが宗廟をつくつて、鬼を以て之を擧す（鬼は鬼神である、擧は人鬼を祭るの名である）春秋に祭祀し、時を以て之を思ふ

生には事へて愛敬し

死には事へて哀戚す

生民の本盡き

死生の義備はる

孝子の親に事ふること終りぬ

と結んである。孔子を、人倫の大道の百世の師と稱する所以である。

私は、これらの教へを深く孔子に謝する。さりとて、山上の垂訓その他に、これら孝道のこ

とを説いてないこと、これら祭りのことを説いてないことを、毫も不足と思はない、各國の修身倫理の書は、大抵、これを教へて居るからである。

前から申した通り、孔子は、専ら斯の世のことを説かれた、それ故に、孝徳を主に、君に父に、長上者に事ふる所以の道を説かれたのである。未來のことを説かれなかつたのは、斯の世の事に一層切ならんがためであつたのであらう。

基督は、天國のことを説かれた。少くとも天國に入る者の性情、資格、そのこゝろ得の素養を説かれた。従つて、斯の世のことは、其の關するところにあらずと爲されたのである。

兩者の建て方の相違は、この兩篇に述べ得て略ぼ明かであらう。私は、たび／＼相對比して讀み返して居るのである。

第四 孔子の天と基督の父

上來の如く考へて居る私は期せずして、孔子の言はれた天と、基督の語られた父とに就き、

數言の卑見を述べたい感じがする。

但、それは、兩つながら、最も、高く、深い、博厚限りのない教へであるから、なか／＼解りにくい節が多いので、私は、その要旨を捉み得たといふ自信は固より無い。

然も、盲人は蛇に怖ぢない、少しく語つて見るのである。

孔子は、多くの場合、人間以上のこと、人間以外の問題を語ることを避けられた、例へば

鬼神のことは敬して遠ざくる

が如きである。鬼神といふは、別のところにも述べた如く、神明と解すべきものであらう。その神明の話をするを、孔子は多く避けられたといふのである。但、敬して避けられたのである。或は、敬するから避けられたのである。孔子は、神明を深く敬して居られた。だから、しば／＼天を語られたのである。然し、決して浪りには語り給はなかつた。或人が死を問ふた時は、

未だ生を知らない、何うして死を知るものか

と答へられたとある。弟子其の人の學問知識の程度を案じて、斯く答へられたのだといふ註も

あるが、さうかも知れない。前段の敬して避けられた意味と合せ、注意深く考ふべきであると思ふ。

こゝに、聖書の句を挿むは、必ずしも木に竹を接ぐの類ではあるまい、基督の言葉に、

已れ地のことを言ふに汝等信ぜずは、天のことを言はんには、いかで信ぜんや

といはれた一節がある。然り、地のことを言ふのを信じ得ない者が、天のことを言ふのを聞き

分け得る理由はない、基督のこゝに示された論理は、孔子の、こゝに

生のことを知らないのに、何うして、死のを知るか

と言はれたことに、あたかも、符節を合するのである。

いづれにもせよ、死のこと、鬼神のこの話は容易でない。

二

が、孔子は、たび／＼、天のことを話された。天の内容を説明せられたとは思はれない——後の萬物の父母のところは別である——が、孔子が、天を敬して、天の靈命を重んじ、天に接して、天と偕に暮さんと思はれたことは確實である。そこで曰はれた。

君子には三つの畏れがある

其の一は、天命を畏るゝことである

と、孔子ほど天命を畏られた方は稀であらう。おそらく東洋に無比、世界に無比、世界で一番天命を畏れ敬はれた方かも知れない。そこで、孔子の心からの述懐は

天を怨みず、人をとがめず

我を知るは其れ天か

であつた。されば、不遇を極めた——俗界の標準から——ごとき孔子の生涯に於ても、孔子の人知れない喜びは、天に知られたことであつた。天に知られて居るといふ信念と自覺であつた孔子は、その自覺の極めて強かつた人である。聖書に、義人は信仰に由つて活くとあるは、孔子の如き人を言ふたのかと思ふたことが私にはたび／＼の経験がある。

或る時、よからぬ者が孔子を襲ふといふ風聞があつて、弟子達は警戒した、孔子は、それを見て、

天、徳を我に生ぜり、彼等、それ、我を、何うするものか

と言つて、一向、氣にもせられなかつた様子である。それ程に深く天を信じ、天をあがめ、天と偕に暮して居られたのであるから、天地の變化にも、常に甚深の注意を拂はれ

迅雷、疾風には必ず變ず

とあつて、はげしい雷鳴、風雨の時には、形を變じて慎まれたとある。誠に、稀らしい心がけの人であられた。

孔門の教へが、欺かないところ、嘘をつかないところに在つたことは、勿論であるが、そして、それは、吾れ人の注意を怠るべからざる點であるが、天と偕に暮された孔子は

吾れ誰をか欺かん、天を欺かんや

と言ふて居られる。これは、吾等の流儀で言へば、人を欺くことは或は可能の場合があらう、天を欺き得る場合は絶対に無いといふことに當るのであらう。斯くして行住坐臥、天と偕に在ることを意識して勵まれた。

孔子の道の本づくところは、要するに、天であつた。

私は斯く解する。先儒も亦斯く解されたものであることを信じて疑はないのである。

然らば、孔子の言はれた天、偕に居られた天とは、到底、いかなるものであつたらう。それは、靈性なき、知覚なき、たゞ、漠然たる上界の空そのまゝの如きものであつたらうか、目に見ゆるたゞそれだけのものに止まつて、それ以上の生命のないものであつたらうか。

これに對しては、蓋、一定の説がなかつたものと認むべきであらう。それは、研究の結果、諸説紛々として、歸一する所を知らず、定説なきに歸したといふよりも、深く研究せずして、半ば不問に附せられるゝに終つたといふべきものであらうかと私は解して居る。そして、昔はそれでもよかつたのであらうが、基督教の入つて以來は、それでは済まされず、一體、天といふ天の内容は何か、漠然として不明でないか、それには、神の神聖を欠ぐ、遂に神以下のものであるなど、紛々として論難せらるゝに至つたのである。

が、私の解するところは、それらとは、やゝ異なる所があるので、憚らずそれを述べれば、私は、孔子の言はれた天を、主として次の二點から考へて居る。二點を考へる基礎と致して居るのである。

其の一は、書經にある次の句である。

惟天地は萬物の父母にして

惟人は萬物の靈なり

孔子は、勿論、この考へを體して居られたに相違ない、そして私は、この思想を以て、儒教の精神であると爲し、儒教の全部を通じてこの思想が流れて居るものと思ふて居るのである。尙國君と天地との關係は、

惟、聰明、元后となり（國君といふ意味）

元后、民の父母となる

と述べてある。乃ち、國君は天地と同じく民の父母、萬物の父母であられるといふことになつて居る。

されば、孔子の所謂、天は、決して、無靈、無覺、人事と交渉のない空靈なものでなかつたのである。

其の二は、孔子の解せられた神明である。孔子が、明かに神明の存在を認めてゐられたこと

は、論ずるまでもない、こゝには、孝經の説明を借るが、周の國の始祖は后稷と稱せられた。周公は、凡そ、その千二百年の後に生れた方であるが、后稷を追尊して、神に配して祀られた。昔、周公は、后稷を郊祀して、以て天に配し、文王を明堂に宗祀して、以て上帝に配せられた。

と記してあるのがそれである。こゝに郊祀と曰ひ、宗祀と曰ひ、上帝と曰ひ、天と曰はれたことは、要するに、神明をあがめ、神明を祭るの言葉であつて、孔子は、深くその威靈を認められたのである。認めてゐらるればこそ斯く推稱せられたのである。

そして、孔子は、その威靈ある神明の靈主に對し、祈りをさゝげて居られた。

丘の祈ること久しである

罪を天に獲れば祈るに所なしである

然らば、その神明なるもの竟に如何、孔子は

鬼神の徳たる其れ盛んなるかな

と其の徳をたゞへられたが、然しながら、その鬼神は、

之を視れども見えすである、また

之を聴けども聞へすである

さりながら

物に體して遺さず（物に遺すところなく體して居られる）

天下の人をして、齋明感服して、以て祭祀に事へまつらしむ

洋々乎として其の上に在すが如く、其の左右に在すが如し

と説いてある。

私は、孔子は、斯の如く神を觀じてゐられたものと思ふ。言ひ換ゆれば、神は、目に見えない靈なるもので、そして、天地宇宙、人生の一切を支配し撫育してゐ給ふのである。それが孔子の天であり神であつたのである。

されば、私の解する限り、孔子の道は必ずしも基督の道と遠く離れてゐなかつた。そして、その神は、また、基督の稱せらるゝ天の父なる方であられたのである。

以上の如き私の理解が、儒教の古への先輩の説に合して居るものか、將た、反するものかは私には解らない、私が、廣く讀んでゐないからである。

が、私は、古への先輩達は、孔子の教へを、吾れ人の共に解し得る人道の範囲内に限らんとし、従つて天地神明の範囲に屬するより深奥なる孔子教の要部を舍いて問はず、これを圏外に葬り去らんとし、以て孔子教本來の要旨を矇晦に附するに至つたものでなからうかと、不遜と虞れながら、窃に疑ひを抱いて居るのである。

中庸の初めにある天といふ字を、中村惕齋といふ先儒がこれを解して、

天と稱するに數多の義あり、或は形體を以ていひ、或は主宰を以ていひ、或は道理を以て云ふ

と解したる、天を造化の主宰者と解したところは、流石に、道要に達したものと私は感服するのであるが、孔子の千載の後の、最有名な弟子、朱熹が作つた中庸の序文に由れば、

蓋、上古の聖神、天に繼いで極を立てしより、——私は極に立ちしよりと讀みたい——道統の傳、よつて來るところあり

と述べてある。それを中村惕齋は釋して、

上古聖神とは、大抵、伏羲、神農、黃帝、堯舜の五帝をさす

聖人の上に又別に神人あるにあらず

と解したのは、この文章の解としては固より當然であらうが、然しながら、黃帝や、堯舜等の五帝を以て、道の究極の源と爲し、これが極元である。その以前に源はない、道はない、別の神人はないと限りとゞめたことは果して正當であつたらうか、正當の研究、正當の理解であつたらうか、私の疑ひは、こゝに、根ざすのである。或は芽ぐむのである。

それは、他人の所説に由つてよりも、寧ろ、朱子自身の所説に由つてこの疑ひをたしかめることが出來ると私は思ふて居る。同序文の終りに於て、朱子は

道統の傳に於て敢て妄りに議せずといへども、初學の士或は取ることあらば、亦、遠きに行き高きに升るの一助に近からんか

と結んで居る。これは、一面に於て謙辭である。私は、謙辭としてその趣意を諄するものである。けれど、然しながら、こゝの

道統の傳に於て敢て妄りに議せず

と言つたことは誤りである。それは、その初めに

道傳の傳よつて來るところあり矣

と斷言したと明かに矛盾して居る。私は、たしかに矛盾して居るものと思ふ。

朱子は、その中間に於て

心の虚靈知覺は一ならんのみ

と推定して、心靈の論に入り、道心と人心とをくらべて、その關係論に入り——古くからある説——道心をして主たらしめ、人心をして命を聽かしむべく、測らずも、理知だけを以ては度りがない所の、幽遠の境にも入り、そして

一旦恍然として得るところあり

と、恍然たる夢寐の境にも入つて居るのである。

思ふに、彼は、こゝに至つて、もはや、究むべき所を究め盡したものだと思ふであらうが、後世の吾等から考へれば、尙、研究すべき所が残されて居るのである。現に、前に掲げた上古

の聖神を、伏羲以下堯舜までの五帝に限つて、更に、其の上に遡らなかつたところに、重要な落ち度があるのである。彼等は「聖人の上に又別に神人あるにあらず」と解したけれど、神人なるものはイザ知らず、神明なるものは、たしかに其の上に在し、其の奥に君臨してゐ給ふと思ふべきものであるまいか、そこに彼等の缺點があつたのであらう。

孔子の考へには、正に、その奥に達してゐられたと思はねばならないものがあるのである。

悲しいかな、弟子達がそこに達し兼ねて、反つてこれを矇晦に附したのである。

五

轉じて、基督も天と呼ばれたことは往々あつたのであるが、それは、普通に、神であつた。

神といふ意が、その場合、明瞭に現されてゐた、そして、その神は、また常に天にまします父であつた。天にまします吾等の父よ、願はくば御名をあげさせ給へである。基督は、終始、この意味を教示せられたのである。想へば、基督ほど、神と父とを同意義に説かれた方は古今に無い、孔子さんの認められた天の父性は、基督のそれに較ぶれば、遙に隔絶してゐた。やゝもすれば、孔子教に、不満を訴へる者の絶えない所以である。

基督は、天を父と呼ぶのみならず、己れを父と同視して居られた、あたかも、吾等の家庭に於る父子の如き見かた考へ方である。それ故、日々のパンをさき玉ふにも、その都度、神なる天の父を呼んでさき玉ふた、日々の食である、肉體の糧である。それは皆神より恵まれたもの即ち父より恵まれたものとするのである——吾等の家庭の現實を思はれたい——それは人々の努力に由つて生産したものであらう。けれども、五風、十雨、風の恵みもなければならず、雨の恵みもなければならず、日光の恵みもなければならず、空氣もなければならずまたその土地がなければならず、皆、人力以上のものである。それ故に、人力を加へて生産したその物をも食するに當つては、神を仰いで謝するのである。神は父であらうから、乃ち父に謝していただくのである。

こゝに至つて、基督の道は吾等に甚だ近い、或意味に於ては、孔子の道よりも遙に吾等に近

5。

されば、ヤコブの井戸に水を汲むことに疲れると嘆いたサマリヤの女に對しても、嘆くな、眩やかな、神は近きに在し給ふ、神は、その許等の父で在し給ふ、母で在し給ふ、母の如く、

父の如く、その許等皆のものを可愛がつて、いたはり、助けんとてゐ給ふ、その父を信じて忘るな、近づいて拜しまつれと教へ給ふたのである。その教へに

女よ、我が言ふことを信ぜよ

父は、斯の如く拜するものを求め給ふ

神は靈なれば靈と眞をもて拜すべきなり

考へて見れば、神を、これ程、簡明に教へた教へはない。

(一) 神は父で在し給ふのである。だから吾等に甚だ近い、吾等の行住坐臥、一刻も離れず、吾等の近くに在して助けゐて下さる、神と吾等とは父子の關係である。

(二) けれども、その神は靈の存在にて在すゆゑ、見えさせ給はない。例へば魂の如くにして吾等の氣づかぬ時にも所にも吾等を守つて下さる。神と吾等とは、肉と魂との關係である。

と申すのである。天といふ解釋、こゝに至つて生きて居る、孔子の場合に於てよりも、一層、靈活勝妙である。

且又、基督は斯く教へ給ふのみならず、終始、身を以て天なる父を代表し、以て天なる父の父としての神性を表揚するにつとめ給ふた。同時に、子としての——その獨り子としての——己れの使命を果すにつとめ給ふた。

我の父にをり、父の我にを給ふことを信ぜぬか

我の父とは一なり

すべて父の有ち給ふものは我ものなり

これらのこと、信すべしといふか、信すべからずといふか、信する者もあらう、信する能はざるものもあらう、が、斯の如く天なる父と、地上の子とを、同一體として、直截に、明晰に、大膽忌まず、斷々として説き且命じ給ふたことは、孔子及びその亞流者の、到底、夢想だも爲し得なかつた所である。これをば、生れの相違とさへ謂ふ所以であらう。終に世を去り給ふとき弟子達に

我を信ぜよ、己が父——天の父——の家には住處多し、

われ汝等のために處を備へに往く、と

さもく、吾等の、斯の世の現實のことの如く教へ給ふた。そして、天なる父と吾等との關係に關しては、かさねて、

われ我が父に居り、汝等我に居り、われ汝等に居ることを汝等知らん

と教へられた、如何にも平明の教へである。然しながら同時に驚嘆すべき不可思議の教へである。當時の、親近の弟子の中にも、本當に、この邊の意味を解した者は、幾人もなかつたらしく。

そして、基督の使命を更に考へて見る、彼は、これらの理義を吾等に教説せんがために來られたのであつたかといふに、否、さうでなかつた、教説はその支流であつた、本流は、吾等に役はれて働かんがためであつた。そして、吾等を父の許につれ戻さんがためであつた。

人を役ふために我れ來れりと思ふ勿れ

反つて人に役はれんためなり

例へば、母のみどり兒を眠らす如く、吾等をはぐみ育て、立ち上らせんためであつた。それが、その降世の全使命であられたといふことになつて居るのである。

それ故にこそ、基督の道は、一般民衆に傳へられたのである。智慧ある者や、權威のある者や、世に時めく少数の人達には示されず、反つてこれを學ぶ者には、學問の素養のあることをすら必要としなかつたのである。

天地の主なる父よ、われ感謝す、これらのことを^{カキ}智き者、^{サト}慧き者にかくして、嬰兒に顯し給へり。

右の如く、神を父としての基督の道は明るい、その道は、明白に標識せられた、天地の上に、神のあることを信じ、その神が父母の性を備へてゐ給ふことを信じ、且、見えない靈性の存在で在り給ふことを信するや否やである。信じ得るや否やである。

私は、これを信じた者である、信することに由つて、神を父として親しみまつり、懐かしみまつることが出来、それ故に、斯の世の父母を下げすみ輕んずるといふ如き非情のことは毫もなく、反つて、ますます、これを尊み重んじまつることになり、因て、私の人生觀は一變したのである。一變して、明かなものになり、麗はしきものになり、温たかきものになつたのである。私は、孔子の言はれた天、孔子の敬せられた天に、この温かい父性を加へられたことを基

督に謝したものである。

但、それは信に由るもの、宗教の世界に屬するものである、私は、信の世界に、天の性を明かにし得たことを感謝して躍つた者である。

第五 死んで復た活く

君の信するクリスト教の極意はと、折り／＼私に問はれた方がある。その多くの場合に、私は、

死んで復た活くることである

と答へた、これは(一)私に取り不用意の答へではなかつた。長い間の經驗から得た結論であつた(二)けれども、問ふたお方には、頗る案外の答へと思はれたと見え、多くは、さうかとはばかり、本氣には受け取つて下さらなかつた。烏賊は、攻めらるゝとき、黒い汁を流して――血かも知れない――逃げる、それで跡をくらすのだと言はるゝが、私のこの答へも、そんな卑怯な戦法を私が弄したものゝ如く思はれた場合がないではなかつた様に覺える、願みて遺憾

に堪へない。

が、考へて見れば、同じ様な例が、クリストの昔にもあつた。クリストは、物のわかる筈のニコデモを——彼はイスラエル人の師であつた——迎へて、

人もし新に生れずば神の國を見ること能はじ

と教へられた。これは、私のこゝに言ふた「死んで復た活く」と同じ意味の言葉であつた筈、ところが、彼れニコデモは、斯の一語に蹙づいて

母の腹を出た者が、何うして母の腹に返つて、復た新に生れ更ることが出来るものですかと口答へをし、あたかもクリストに愚弄されたものゝ如く感じたのか、憤悶して去つたといふことである。

然しながら、斯の語はそんなに無理な解し難い内容であつたらうかといふに、私は、近所隣りの交際の間にすら、まゝ、この事實を見つゝある者である。少しも不思議とは思はない。

さらば近所の人達は何う言ふて居るかといふに、

「彼の人は、従來、大酒飲みで、酒癖が悪かつた、飲むと直ぐ怒り出す、その時は、細君も

子供も、他人との見界がない、なんでも、かんでも、目に見ゆるものは叱る、手に觸れる者はなぐる、それは、亂暴狼藉、限りもない極道者であつた。が、近來は何に感じたのか、一滴も飲まなくなり、全く、生れかへつた生一本の人となつた。やさしくて、穩かで、誰にも彼にも親切になつた。變れば變るものだ」

といふのである。基督の教へられた更生は即ちこれだと私は思ふ。

想ふにこんな噂は、諸君の耳にも、しばしば觸れつゝあるのであらう。それは、一酒飲みの例に限らない。或は、博突が飯よりも好きであつた者が、はつたと博突をやめたとか、或は、朝寝坊、夜更かしの者が、やめて早起きになつたとか、或は、勉強の嫌ひな者が、頓に、讀書好きになつたとか、その他いくらも、昨日の生活を今日に一變して、感心すべき新しい人間になつたといふ名高い評判があります。

私は、斯の如き人を、死んで復た活きられた人と申すのである。

且、かくの如きは、獨り、精神や、氣質、習慣等の方面にとゞまらず、身體の方面にも復たある、例へば、身體が、前年までは非常に弱かつたが、何々の病氣に罹つて、生くるか死ぬる

かの目に逢ひ、そして、助かつてから、打つて變つた無病健全の人になつたといふのである。

近年、次々に興つた、新しき宗教の開祖、例へば、大本教や、天理教とか、人の道や、生長の家とかの開教者達は、いづれも、その體驗を有した人達と傳へられた、乃ち、一旦はいづれも死ぬるほどの大病に罹つて、有名の醫師は、一人ならず、二人ならず、匙を投げたのであるが、それでも死なず、助かつて、復た活き、その後は、以前に優る強壯の人になつて、びんびん働いて居られるといふのである。想ふにその教への中には、誤つた雑多の分子が混じてゐるのであらう。それで、彈劾され、禁止されるに至つたことは別として、彼等が、世に傳へらるゝ如き起死回生の體驗を有する事實は、察するに争ひのない所であらう。

私は、直接に、彼等を知らない者だが、私の友人故福井松湖は、又その體驗を有する著名の一人であつた、彼は、神戸に成生會を組織し、健康を増進する一要道として、多年「心行」といふことを勵み、會員等に訓授し、獎勵してゐた。彼は、その初め、胃潰瘍に罹り、おびたゞしい出血をして、醫師に見放され、もはや、助からぬ生命と宣告せられたものである。その時彼は、クリスト教會の牧師をしてゐたので、クリスト教會の牧師をする身でありながら、これ

位ゐの病氣に打ち克ち得ないで、壯年にして早く死ぬるといふことは残念千萬の次第である。これは自分の信仰に未だ足りない所があるのであらうと思ひ返し、一生懸命に祈つて祈つて、そして癒つた、といふのである。それから彼は、たび／＼斷食をした、最後には實に四十日に亘る斷食をした。そして、精神がますます／＼、身體がますます／＼健康になつたと申してゐた。されば、氣質の上のみならず、身體の上にも、その様に、死んで復た活くる例が、多々あるのである。

それは、醫師達の許されぬところであらうか、科學の寵兒であらるゝ醫師達の、てんから、否定して、聽き容れられぬところかといふに、私はさうと思はない、私は、いく度か腸チブスに關する話を聞いた、それは、生命取りの病ひと稱さるゝのであるが、同時に、又、病氣を洗濯する病ひと稱さるゝのである、と、申すは、腸チブスにかゝれば、舊くからの數多くの病ひを一掃して、新たに無病健全の身體になるといふのである、但、腸チブスにかゝると重い、大概、死ぬる程の難儀をして、一旦は呼吸の根がとまり、萬事休したかと思はるゝのであるが、幸にして未だ死せず、呼吸を吹き返した者は、それからは一轉、すん／＼快方に向ひ、面

白い程、迅速に回復するものである、そして、いよいよ、全快の上は、前の人とは全く別の人となり、善く食ひ、善く飲み、善く働き、善く肥え、友人等を驚かすに至る、斯の如き例は、しばしばある、それは、係りの醫師の、誇らしく語るゝ所の實例であるといふ。

私はチブスに罹つたことはないけれど、尙、死んで復た活きた一例となるものであらうかも知れぬ、元來、虚弱な身體で、少年時代には早く死ぬる者といはれてゐた。實に、いろいろの病氣を有してゐた者である——子供の時、中學時代までは、主として喘息に悩んだ——新聞に従事して、雅號はと問はれた時、六々居士と答へたわけは、三十六歳位までは、何うにか、活きるだらうけれど、それ以上は難かしい、到底、活き延び得なからうと思ふたからである。——その頃は肺を患へてゐた——勿論、六六居士は、それだけの意味でなかつた、私の郷土に近い長崎灣は三十六灣と稱され、また三十六峯と稱せらるゝ山もあり、鯉魚は、出世する魚として、三十六鱗を有つてゐる。そんな地名や、縁起をも重ねたつもりであつたが、主として、健康の上から、自ら限りをつけて、斯く六々居士と稱したのである。が、今は已に六十六の坂をも越へた。そして、七十七の峠にも漸く近づいて、尙無病息災である、少年の時を顧みれば

自然に別人の感に堪へない、友人中にも、そんな記憶を有して、喜んで下さる人が折々ある。最近

病弱多年母の憂へを滋す、長生今日そゞろに惶恐、上天は育せず素餐の人、一息猶存す必ず用あらん

と詠じた、何うして、そうなつたのかといはるれば、私は、それを舊い私が死んだのである。そして、新しい私が生れたのであると思ふ他はない。即ち、死んで復た活きたのである。それ故に達者になつたのであるから、今生きて居る私は舊い私ではないと答へつゝある。そして、それを、神の恵みと信じ、感謝して居る。老ひたれど一息の存するところ、尙爲さしめんとし給ふ使命のあればこそ、斯く生存せしめ給ふのであらうと思ひ、斯く詠じたのである。怠らず召さるゝ所、示さるゝ所に赴き、眞劍に奉仕せねばならないと心がけて居る積りである。

想ふに、クリストの教へは頗る深い、私には、未だ解し得ないと思ふ所が數々あり、且それは、斯の世の知識では、到底、解し得られないものと思ふて居る節も數々あるのであるが、然しながら、その一端は略ぼ分つたと思ふて、歡喜して居るところに、クリストが、以上の如く

死んで復た活くる奇しき道を説き、吾等の身體を改造し、魂を再造し、新生を得せしめんと諭示し給ふのであるとの感銘が生じたのである。

それ故、私は、クリストの目的を、たゞ、單に靈界のことを指授し給ふに在つたものと解しない、靈の生命もあるが、肉の生命がある。その生命を大切にせねばならぬ。獨り、未來のこと、來世のことのみを思ふて、現世のことを忽がせにしてはならぬ。さう思ふて居る一派の考へ方は間違ひである。靈性を喚び醒して、肉身と共に、此の世の改造を圖るのである、以て此の世の一新し、天國の如く爲すのである。此の世を直接に彼の世に結び着け、以て今日の生命を未來の生命と化合せしめ、何人にも、五十年の生命でない、七十年の生命でない、皆々、萬年に活くる者、活くべきものであると信じて、その如く純眞に生きよと教へられたものであると私は解して居る。

従つて、その、斯の世のことに關して説かれた所は、孔子の説かれた所と同じく、すべて、道德的である。乃ち道德の改善であり、一新であり、その獎勵である、それを改善し、一新すれば、所謂地上の天國は成るのである、天に成る如く地にも成るのである。然しながら、その

改善がなか／＼容易でないから、

嗚呼信なき曲れる世なる哉

と嘆ぜられたのである。これは、クリストの始めの頃の嘆きでなかつた。寧ろ、その終りの頃の嘆きであつた。孔子が、晩年に至つて

鳳鳥至らず、河、圖を出さず、吾れ已ぬるかな

と嘆ぜられた邊と、互に、相類して居るのである。

そこで、クリストの心を、不遜ながら忖度して見ると、斯の世は、今日のまゝ——今日の人の心のまゝ——では、いつまで経つても、到底、良くなれないものとクリストは見きりをつけられたのである。喩へば、前に掲げた酒癖の悪い男が、酒に酔ふて、あばれ、騒ぐようなものである。その酔ふて、騒いで居る間は、家の者は、怖れ、惑ふばかりで、家庭は治まらず、近所隣りの人達は、逃げ隠れるばかり、交際の爲し様がない、先づ、酒の酔ひから醒めしめることが第一、前に述べた生れ更つた人とならしめることが第一、さうなれば家族は落ち着き、家業は榮へ、家庭は圓滿に、近所の人達の喜び、安心して、交際し、村の空氣、町の空氣は、自然

と、平和になる、それが、有るべき人の世の姿である。何うして、そこに達するか、無くて七癖、吾々には、傳統の癖がある。吾々はその癖に克たねばならぬ。或は、それでもよい、吾々は醉生し夢死するのであると思ひ諦めた人達は別とし、本當に、斯の世に活きんと希ふ者は、須らく死んで復た活きよ、舊い衣を去つて新しい衣を著よ、七生報國、人は新しく生れ得るものであるとの教へが、乃ち、クリストの教へであると私は解するのである。

この教へに従へば、

第一に、醫師は、人の肉體を、たゞ、肉體を扱ふ者としての考へ方を一變せねばならぬ。所謂科學一點張、たゞ、解剖し、分析し、その肉を見るのみ、その靈を見ない從來の考へ方は一變せねばならないものと私は思ふ。

第二に、政治にも同様の考察、反省が必要である、今日の政治は、餘りに目先きのこと、現實のことに逐はれ、肉のこのみを思ふ小さな理窟に囚はれ、僅な人間の智慧を頼りにし過ぎて居る。人間をたゞ五十年の生命と見て居る故、法律の作り方、導き方等にもそれに伴ふ弱點があり／＼と現れて居る。この點に於て、一部の人達が祭政一致を唱へら

るゝ根本の心持には同感を表し得るが、然しながらその方法には、十二分の注意を加へねばならないものと思ふ。

第三に、人生を五十年七十年と限るのは、たゞ、肉體のこと、有形のことをのみ、吾等の生命と思ふからである。その考へ方を一變し、靈性の生命をも、吾等の普通の生命と考へることにならねばならぬ、さうなれば、不朽、不滅、千秋、萬歳といふ如き考へが常識となり、通念となり、従つて、人生が高く、廣く、大きくなり得るのである。

よく、萬歳、萬歳と叫ぶが、私は、これに大きな蓋然性があると思ふ。人間は萬歳に活くる者であるといふ概念を普通にし、従つて歴史性を普通のものとし、祖先と吾等を如實に結び着けて、眼前一切のことをすべて悠久の一環とし、吾等はその一環の一端に携はるものとして、永遠の機構と、理法と、習性との統一、進展を妨げない様にと深く考想し盡瘁しなければならぬものと思ふ。

この點に於て、私は、今日の目先きの得失、利害に拘はり過ぎた、政治、法律、考想、計畫等を、甚だしく幼稚なもの、低劣のものであるとして、これを非認し、嘆惜するものである。

斯く言へばとて、私は、クリスト教で申すクリストの肉體に由る死後の復活、またその昇天といふことを文字通りに信じて居る者でない。それは、信者として相濟まぬことと思はぬでもないが、前にも述べた通り、聖書の中には私の解し得ないで居る箇所が幾らもあるのである。が、歐米を旅行した折のこと、歐米には火葬が流行しないと聞いた、それは、信者達が、クリストの復活昇天に倣ひ、自分達も肉體もて復活する日のあることを期するからであると聞いて、びつくりしたしたのであつた。

(一) 實際、歐米には、火葬が行はれてゐない、全く行はれてゐないのではない、少数は行はれて居るけれど、その九割乃至九割五分までは、土葬である。

私は、歐米の有名な墓地は、大概、尋ねた、ハンブルグの墓地と、ウィーンの墓地が歐洲に於て殊に有名である、いづれも、公園と稱せられて居る。それ位ゝ美麗である。ウィーンではその美麗なものに見惚れて二日も、つゞいて見物した。一面の土葬中には、石碑のみを、高く突つ立てたものもあつたけれど、多くは寢棺の形で、長方形に、平たく墓地を作り、その頭部のところに、扁平の石碑を立て、體部に當るところは、これを平面に伸ばして、花草の類をそ

その柵表てに植ゑ——私の見た時は野菊の季節であつて見事に咲きこぼれてゐた——それが幾十、一列に駢べてあり、手入れと曰ひ管理と曰ひ、善く行き届いて居ることに驚いて感心したのであつた。

私は、この時も、火葬はと問ふたのであるが、そんなことは、新教の信者のすること、舊教の信者は爲さないことだと聞かされた、私の聞くことを欲しないらしい答へ振りであつた。

パリに往つたときは、先づ、火葬のことはと聞いて、その墓地に案内された。それは、電力火による焼き場であつて、現に火葬中のところを見せられた。大概、約四十分にして終るといふことであつた。そこに納骨堂の設備もあつたけれど、流行しないと説明された。

(二) ロンドン市——中央のロンドン——の墓地は、新装したものが郊外に在る、善美を盡してゐた。こゝで、火葬を問ふた時の話に、ロンドンでは、火葬を奨励して居るけれど、行はれない、行ふものは極めて少數である、その理由は、クリストの復活に倣つて、彼等も肉體的に亦復活するとの信仰が深いからといふこと前に記した通り、そして、その信仰は、矢張り、舊教信者に於て殊に篤いといふことであつた。それに對して私は、東京市には一年四萬人位ゝ

の死者があつて、その二萬八千人、約七割は火葬をして居る。それは、年々増加する傾向と述べて、案内者を驚かした。彼は、その原因を思ふて、佛教を信するからであらうが、佛教は火葬を忌まない教へであると聞くと獨語してゐたのである。

儒教に於ては、人の魂には、魂と魄との二種があり、魂は陽性で清く軽く、魄は、陰性で重く、濁りを帯び、死んだ時、魂は天に昇るけれど、魄は地上に下ると説いて居る。その天に昇つたものは永世に活るのである。この説は解し易い、この程度の靈魂不滅説なら、誰にも解る、誰も信じ得る。孔子教が私の常識を囚へて動かさぬ一因はこんな所にもあらう。

尤も、私は、自分の常識に、ためらう所があるから、先輩の経験を否認するとは誓つて申さない。クリストに隨從した當時の先輩が、その見たところ、聞いたところ、確認したところをそのままに記録したものとすれば、それは極めて貴重な文献である。且、宗教には神秘の性が伴ふものである、神秘は宗教の一大要素である。神秘の伴はないものは宗教でない。この意味に於て、クリスト教は、宗教として、神秘の奥深い、奥深い神秘のものを有する。それは、孔子の、おぼろげに解しつゝ、従つて、語ることを避けられた天若くば靈魂に比して、私の興味

を引くことが遙に深いのである。私は、クリスト教を、分らない所のあるまゝに信じ、疑問を前にしつゝ、強ひて解することを求めず、折に觸れて、悟らせらるゝ経験を樂しみとして、不斷にあこがれて居るのである。

第六 斯の世の國と天上の國との間

しば／＼、斯の世の國と、天上の國と申した、それは、到底、別々のものであつて、その間には連絡のないものであらうか。

將た、斯の世の國と、天上の國とは、到底、同種のものであつて、その間には、連絡のあるものであらうか。

これから昔から議論のつけられた問題で、然も、今に至つて、尙はつきりした結論のついてゐない問題であると思ふ。その難かしい問題、百千年未決定の問題に、私が輕卒に結論を下さんとするのは生意氣の沙汰である。私は、決してそんな不適な眞似を致さない。

が、本書に、しば／＼用ゐつゝあるその兩語に關し、私は、何んな心持でそれを用ゐて居る

かといふことになれば、それは答へられぬことはない、私は、一見矛盾したこの兩種の問ひ、連絡のあるものか、無いものかの問ひに、いづれも然りと答へたいのである。乃ち第一の問ひにも——無いものかの——然りと答へ、第二の問ひにも——有るものかの——亦然りと答へて、それで差支へなからうと信じて居るのである。それにはそんな答へがあるものか、相反した二つの問ひに、兩方とも、然り、然り、それは同時に全可であるとの答へが出来るものかの難詰があらう、私も、その難詰の論理を初段に認めるが、然しながら尙次の如く答へたい、答へて差支へが無い筈と信ずるのである。

次の物語りは、聖書を読んだ者は、大凡、知つて居る、有名な話である。私は、初めの中はこれを齒牙にもかけなかつた、つまり、つまらない話、ばか／＼しい話、考慮に値ひしない話と思つたのである。が、その記憶が、時々、胸に往來して、だん／＼次の様に考へることになつた。

私は、それを以て、こゝの兩様の問ひに答へ、それは路加傳の十六章にある死後の話であつて、斯の世でらくに暮した金持と、苦んで暮した貧乏者との、逆に變つた彼世の生活である。

その記事に由ると

或る富める人あり、紫色の衣と細布とを著て、日々奢り樂めり、又、ラザロといふ貧しき者あり、腫物にて腫れたゞれ、富める人の門に置かれ、その食卓より落つる物にて飽かんと思ふ、而して犬ども來りて、其の腫物を舐れり

編者申す、これは、基督が弟子達に、直接に、語り給ふた、坐談若くば講演の一部である。

私は、この様の事例は、世間に幾らもあるものと思ふてゐる。

のみならず、基督が、能くこんな内面の事實を知つて居られたもの、知り抜いて居られたものと、その實世間の事情に通曉せられた觀察に驚いて感心いたして居るのである。

そしてその次には

遂にこの貧しきものゝ死に、御使ひたちに携へられて、神の國に入れり。

とあり、又

富める人もまた死にて葬られしが、黄泉にて苦惱の中より目を舉げて遙にアブラハムと其

の懷裏にをるラザロとを見る

と記してある。こゝにある黄泉は俗に謂ふところの地獄であらう。そして、アブラハムの懷裏こそは所謂天國であらう。されば、斯の世の貧しき者ラザロは天國に迎へられたのであるが、斯の世の富める者なにがしは、反つて地獄に落されたのである。その次の一節は、更に感愴の深いものである。曰く

乃ち呼びて言ふ——富める者が言ふたのであります——父アブラハムよ、我を憐みてラザロを遣はし、その指の先を水に浸して我が舌を冷させ給へ、我はこの焰のなかに悶ゆるなり

地獄に落ちた者の消息は、一向、此の世に傳へられないけれど、地獄に落ちた者の生活の實狀には斯の如き悩みと悶へがあるであらう

アブラハム言ふ、子よ、憶へ、汝は生ける間、汝の善き物を受け、ラザロは惡き物を受けたり、今こゝにて彼は慰められ、汝は悶ゆるなり、然のみならず、此處より汝に渡り往かんとすとも得ず、其處より我らに來り得ぬために、我等と汝等との間に大いなる淵定め

置かれたり

この數節の記事は、所謂地獄と天國との間の峻嚴なる區別を示したものであるが、同時に、また斯の世の國と天上の國との間の峻嚴なる區別の話であると思ふことも出来る。

但、斯の世で善き物を受けたから、彼の世で悩ましめらるゝのであり、斯の世で惡しき物を承けたから彼の世で善き酔ひを與へらるゝのであるとすれば、斯の世の國と、彼の世の國との間には、直接の連絡がある、そこに区分すべからざる同行一如の關係があるものと解せねばならない、解することが出来るのである。そして明かに撞着して居ると認めらるゝ以上の二問に對して、私が、二問とも共に然りと答へ得るの素地を與へるものである。

尙、當時の物語りはそれに盡きない、更に記して曰く
富める人また言ふ

さらば父よ、願くば我が父の上にラザロを遣はし給へ。我に五人の兄弟あり、この苦痛のところ來らぬやう彼等に證せしめ給へ。

アブラハム言ふ、彼等にはモーセと預言者とあり、之に聽くべし

富める人言ふ、いな、父アブラハムよ、若し死人の中より彼等に往く者あらば、悔改めん
アブラハム言ふ、若しモーセと預言者とに聽かずば、たとひ死人の中より甦る者ありとも
其の勧めを納れざるべし

この邊のところ私は、この富める者の心持を能く諒解することが出来る。彼は、斯の國土に於て、賢人先輩の教へを聽かなかつた。それを斥ぞけて、彼れ俗儒等何を言ふものぞと、侮蔑の限りを盡して横着の暮しをした、然しながら、死後にこんな辛い目に逢ふ場合のあらうことは、夢にも豫想しなかつたので、若し、死後の世界の人が現世に再び出て来て、その有りのまゝの姿を顯はに説いてくれたら、あんな氣まゝな生活振りには、決して爲さなかつた。當時必らずこれを改めて正善の生活を送つたであらうと申すのである。それは、獨り斯の富者のみならず、他の富者等も亦齊しく申すところであらう。それは、私どもも察することの出来る、彼れ富める人等の一般の常情であらうと思ふ。

これに對して、アブラハムの答へた所も亦理解できるところである、乃ち、世上にはモーセ

や預言者の教へがあるのである。心ある者はそれを聽いて戒むる所を知る、知り得る爲になつて居る。然るに彼れ富者の如き、心高ぶつた者は、その教へを聽かなかつたのである。聽くも心に留めなかつたのである。そこへ、死人の中から甦へつた者が現れて、何を語つたとて、その人達は決して聽きはしない、相變らず傲然としてそれを見下し、馬耳當風に聽き流すに定まつて居ると論斷したのである。私も、さうだと信する、モーセや預言者の斯の世の教へを聽いても聽かなかつた者が、甦へれる者が現れて、その悔恨の話を告げたとて、それを眞に受けて省みて改むる殊勝の心根の者は斷じて無からうと察する、アブラハムのこの時の答へは、正にその意味、よく人情の機微に徹して居るものと私は思ふ。

そこで、ラザロと、或る富める者との黄泉に於る生活の有様とその悶え——ラザロに於ては歡喜——とは、悟る者は悟るであらう、悟らない者は、悟らないであらう、斯の世の生活の状は、結局、今日のまゝに繰返さるゝのであつて、従つて、斯の國土と天國との連絡は、有る様でもあり、無い様でもあり、吾等の言葉遣ひから云へば、矛盾、撞着の誹りがあるわけであるけれど、神の國の理法から云へば、そこに、森嚴奪ふべからず、動かすべからざる原則があつ

て、その中に、斯の世の國と天上の國とに、はつきりした連絡のあるものがあり、連絡のないものがあり、互ひに相通じ、また、相塞がることになつて居るものであらうと私は斷ずるのである。

されば、七十人の弟子達が、四方に傳道して、自分達の能力以上の奇蹟を顯はし、よろこび躍つて歸へつた時にも、基督は彼等に教へて、

されど、靈の汝等に服するを喜ぶな、汝等の名の天に録されたるを喜べ（路可傳第十章）と指示して居られるのである。斯の世に於ての働きが、そのまゝ、直に、天に録されたのである。録されつゝあるのである。その後、弟子達が

吾等の國籍は天に在り

と歎んで叫んだ所以も亦こゝにあつたのであらう。

初めに述べた如く、私は、この問答を最初は氣にかけなかつた、何年のころよりか、多年の後に至り、斯の如く思ひ運らすことに由り、また、若干の興味を感じるに至つたのである。要するに、私は、斯の世の國と彼の世の國とは一路相通じて居る、それは必らずしも渡りがたい

飛び越へがたい、高遠の距離のあるものではないと思ふて居る。

x x x

基督は、以上の如き話を、以上の如く爲されたことになつて居る。

が、孔子は、以上の如き話を全く爲さらなかつた、主として斯の世のことを語らるゝ孔子に取つて、それは、沒利害、沒交渉であつたからであらう、且、孔子は

怪力亂神を語られなかつたこと

になつて居る。以上の如き話は、孔子から見て、則ち所謂怪力亂神の部であつたであらう。私はその語られなかつたことを毫も異しめない。

とは云へ、基督の以上の如き話も、斯の世の常識の涵養指導に何等の貢獻なきものとは決して謂はれない、善く讀む者は又善く利用するの機會があるであらう。

第七 結婚に關して

(地上の教へと天上の姿)

一

結婚といふことは必ずしも俗なことでないが、斯の世の執着の一番深いものである。或は、最もしつこいものとも謂へる、孔子が、反覆意を用ゐて、秋毫も漏すところなく、指示し、説明せられた筈である。

それに較ぶれば、基督は、あつさりこれを説かれた、殆んど意に介されないものゝ如き節もあつた。

一方は、斯の世のことを説く教へとして、一方は、天國のことを説く教へとして、兩者の對差の最も明徴なものと思はるゝから、こゝに、少しく記する。

二

孔子の教へが、東洋流の家族主義といふか、家の跡目相續に重きを置いて居ることは申すまでもないところであるが、孝經には

父母これを生ず、續くこと——相傳へて續くこと——焉よより大なるはなしと、孝行にもいろ／＼ある、現に、孝は百行の本といふのであるが、其の中でも一番大きなものは孝である。孝行に優れた孝はない。その孝に、殊に、重きを置くべきは、跡目相續である家系を斷絶せしめない様に注意すべきぞと斯く教へてある。

然らばその家系を相續して絶えさしめない道はといへば、結婚である、結婚がその家系相續の唯一の道で、また、家庭平和、血族維持、血族播延の最高の方法である。それ故、孔子は、その結婚の方法を定め儀式を擇ぶことに、最深の注意を拂はれたのである。

一例を擧ぐれば、大學の首章のところに

國を治むるは其の家を齊ふるに在り、詩に曰く桃の天々たる其の葉蓂々たり
この子こに歸かへぐ、其の家人に宜しからん

とあつて、如何にもその通りである。結婚に由つて兩家の血脈が通じ、社會が榮へ、天地が潤

ふのである。これは、誰も経験のあること、この分りきつた事實を捉へて、諄々として其の理を説いて忽がせにしないところに、孔門の本領があるのであらう、中庸には、更にその理法を推し進めて

君子の道は、費にして隠——費とは物を用うること窮まりなき義とある、斯の世の經濟の攘々として極限なきことを謂ふのであらう——夫婦の愚も以て與かり知るべし。其の至るに及んでは聖人といへども亦知らざるところあり

と、君子の道を、聖人の知慧にも及ばぬ、遠いところのあるものなりと述べ、但、それ程に遠いところのある道でも、その極意は、要するに、夫婦の間に發するものだとして示定して居らるゝのである。そこで、

其の奥義は——ひとり天地に察トキらかなり

と夫婦の道の奥義を天地神明に託して居られるのである。仰いで天地、俯して夫婦、孔子の教へはこゝを發足點として居る。それだけ、結婚は、深く省みて注意せねばならないことであつて、思へば思ふ程、結婚には奥深い神秘が籠つて居る、その間は神の合せ給ふたものである。

人の合せたものでないといふ秘義が籠つて居る。人は己が自々恣ままゝに合してはならないのである、念にも念を入れる孔子は、花婿が——王者である——盛裝して、門を出て迎ふべきことを示して

大昏既に至る、冕して親ら迎へる

と、述べて居られる。これは哀公といふ君主の問ひに孔子が答へられた一節であるが、哀公はその一句を聴きとがめて

冕して親ら迎へるとは己に重からずや

と、口を挿まされた。——あまり重過ぎずやといふ意味——孔子はそれに答へて、先づ愀然色を作されたとある。この質問を聴いて、無作法な問ひを聴くものかなと思はれたと見え、孔子は、その非禮無識を甚しく咎められたのである。曰く

二姓の——兩家の——好みを合せて、以て先聖の後を繼ぎ、以て天地社稷宗廟の主となるのである。君は、何を以て重過ぎると謂はるゝか

と、哀公は、勿論、グーの音もなく、折れて了つて、それは、寡人が悪かつた、更に其の上の

ことを聴きたいと求められたので、孔子は更に曰はれた。

天地合せずば、萬物生ぜず、大昏は萬物の嗣なり

實に婚姻に由つて萬物が生々發展するの理を述べ、婚姻が萬物の本であることの實を、流石に論じつくして深く徹底して居られる、私どもも、もつと深く、婚姻の意義を考へねばならないのである。

尙、孔子は、結婚を祭りに結び着けて居られる、結婚は祭りの道になり、祭の素となると言はるゝのである。私も、成る程、さうだと會得した。そこで、その教旨に従へば、

祭りは養ひを追ひ孝を繼ぐ所以なり（禮記祭統篇）

となつて居るのである。然り、祭りは孝行を繼ぐ所以である。私は、この意味を長い間氣づかずして過してゐた。この邊を読み、心靜かに考へ運らすに及んで、豁然とでもいふか、何か悟らせらるゝ所があつて、今までの不逞を詫ぶると共に孔子の教への一段の高さに傾倒した次第である。それ故、孔子は、夫人を求むる所以の理由を改めて次の如く結んで居られる。

既に内自ら盡し、又外に助けを求む、昏禮是なり——こゝまでは誰も解して居るところで

あらう——故に、國君、夫人をめとるの辭に曰く

君の玉女を請ふて、寡人と共に敝邑を有し、宗廟社稷に事へんと

此れぞ助けを求むるの——夫人を迎へるの——本である

夫れ祭りは必ず夫婦にて之を親らすべきものである

結婚といふことの大切なる意義は、こゝに盡きて居る。私どもこのことを顧みれば、私どもは、これをこゝまで考へず、もつと疎略に、簡単に考へてゐたのである。

もつと、鄭重に思ふことに、考へ直さねばならない。

私は、記し來つて、こゝに、改めて孔子に謝するものである。

三

これに對し、基督は何を説いて居られるか、何も説いて居られない。結婚に對する基督の態度は冷々淡々であつた。と謂へると思ふ、勿論

神の合せ給ふた夫婦である、今より後は一體である。人、これを離つべからざる

の教へは、尊とい、何人もこれに感謝いたして居る。そして、基督自ら結婚の席に臨んで、こ

れを祝し、これを助けられた場合はある。が、斯の世の夫婦の天國に於る状態を問ふた者あるに對して（サドカイ人は復活を信じない、そこで復活ありと教へ給ふ基督に對して難詰的に問ふたのである）

師よ、人もし子なくして死なば、其の兄弟かれの妻を娶りて兄弟のために世嗣を擧ぐべしとモーセは云ひました。我等の中に七人の兄弟ありしが、兄めとりて死に、世嗣なくして其の妻を弟に遺したりその二、その三より、その七まで、皆かくの如く爲し、最後にその女も死にたり。されば復活の時、その女は七人のうち誰の妻たるべきか、彼等皆これを妻としたればなり。

私は、假設の例としても、こんな場合を思ふことを欲しません、これぞ議論のための議論で、知らず／＼この深みに落ち込んだものと思はる、それとも、彼等の當時の輕佻の風俗が、こんな問ひを起させたものであるか、心外に堪へない。

基督は、隙さすそれに答へて、

イエス答へて言ひ給ふ、汝等、聖書をも神の能力をも知らぬ故に誤れり、それ人よみがへ

りの時は娶らず、嫁がず、天に在る御使ひ等の如し。

當時のサドカイ人等が、如何にこの御答へを解したかは私に不明である。たゞ、基督の教へを窺はんとする者として、私の思ふ限り、基督は、婚姻に關して多く語ることを欲せられなかつたものゝやうである、その意は、それは斯の世のことである。

天上のことでない、天上の國に志ざす者は、もつと、高處、大處に思ひを馳せよ、そんな地上の習慣、儀禮をもて、天上のことを律せんと思ふてはならないと、たしなめられたものゝやうである。

こゝまで、思ひを高めて、俗世を乗り越へて考へれば、基督の旨をも、成る程と、尊とく敬賛し得られるが、これを孔子の教へに對照すれば、その隔差の甚しきに驚かざるを得ない。實に、兩者の教への差は、この邊に於て、殊に、顯著であらう。

四

尙、こゝは言ふべき適當の場所でないかも知れないが、便宜のためにこれを附記すると、前に掲げた祭りに關する孔子の教へである。

祭りは孝を繼ぐ所以として、そこには、先祖の靈に對する夫婦の親祭がある。乃ち夫婦相助けて、親から勞して、先祖の祭りをするのである。そして、父祖在世の間に、もつと盡すべくして盡さなかつた怠慢の跡を謝するのである。その在天の靈をあがめまつり、祝ひまつり、慰めまつり、安んじまつるのである。近いところより遠きに及ぶ、直接、先代の父祖よりして、三代の祖、五代の祖、七代の祖に及び、推し／＼と遠代の祖に及ぶ。

斯のこゝろと習ひは、自然にして、太祖元始の神、開闢太初の神に及ぶのである。

そして、その開闢太初の神は、無論、見えさせ給はぬ、聽えさせ給はぬ、靈なる尊位にてゐますのである。

吾々は、その靈位をよく禮拜することが出来る、それは、見えない遠祖を禮拜する自然の習慣があるからである。

されば、この點に於て、孔子が、祭るとき在すが如し、神を祭るとき神在すが如しと、祭りを祖先の祭りと神の祭りと二種に分つて、吾等に、敬意を双方に盡すべきことを教へられたのは正しい、それは、誠に情理を兼ね備へたものである。

くり返すことにもなるが、孔子の學に於ては、神を尋ぬるのは、また、祖先を尋ぬるので、私は、祭りに於て孝を繼がんとする孔子の教へは、知らず／＼吾等人類が神の子として、神を父と仰ぎ、これを敬し、これを拜し、その經綸を思ふて、その指導を仰ぎ、その恩澤に頼らんとする、頼らしめんとする基督の道への通路を開かれたものと思ふ。一切のこと、孝が本である、報本が基調である。孝なる心がけをさへ忘れねば失錯はない。

第八 順な説き方と逆な説き方

上來の對照に於て、孔子と、クリストとの、ものゝ説き方、教へ方に格段の相違があることが、自ら解つたと思はれる。

孔子は、何事も、ものを正面から見られて、それを順に説き下された、それらの順にあらんことが、孔子の願ひであつたのである。例へば、政治を問はれたときに

君、君たり

臣、臣たり

父、父たり

子、子たり

と答へられたのである。政治の眞義とは、成る程、君が君として、臣が臣として、父が父として、子が子として、各々その分に應ずる務めを適當に果すことであらう。されば、治世とは、それらの要素が各々處を得た姿を謂ふもので、亂世とは、それらの要素が各々處を得ない姿を謂ふものであらう、孔子は、この答へに際し、事の正面から、その有るべきの姿を有らしむべく説かれたのであるから、何人も、成る程、さうかと、惑ひなく首肯づくことが出来るのである。現に、吾々は、皆、この説、その他、これに類した、孔子の説き方、教へ方を聽いて、全く、常識の先生であられると感心して居るのである。

基督の説き方はさうでない、その言葉は、簡勁であり、峭直であつても、その意味は必ずしも平明でなく、二千年後の今日に至るまでも、尙その正解を得ず、こうか、あゝかと、揣摩になやませられて居るものが尠くない。それは、しばく、逆な説き方を爲されたからと謂ふべきものでありはしまいか、例へば

われ地に平和を投ぜんために來れりと思ふな、平和にあらず、反つて劍を投ぜんために來れり

それ我が來れるは人をその父より、娘をその母より、嫁をその姑嬢より分たんためなりと言はれたところがある。どう考へても、これは、基督の心持を正面から順に説かれたものと思ふことは出来ない、他の反面から逆に説かれたものであらうと思ふの他はない。何うして、こんな説き方を擇ばれたのかと、その理由の詮索は別として、吾等の普通の解し方に於ては、斯くなるのである、反面から説かれたものであらうと思はざるを得なくなるのである。さればその解釋には、相當、斟酌を要すること、

孔子が、人々の父が父らしくあり、子が子らしくあり、相和して、相親しまんことを求め獎められたのに對し、

基督は、父が子と争ひ、娘が母と争ひ、嫁が姑嬢と争ふて、相分れて、相悖らんことを獎勵せられたものと解しては、斷じてならないものと固く信ずる。文字通りに讀めば、或はさう言はれたのだと謂へないことはないのかも知れぬが、然しながら、その眞意は決してさう

でなかつた。そして、その眞意の決してさうでなかつたことは、誰しも明かにこれを認めて、凡そ、基督教の信ぜらるゝ所、聖書の重んぜらるゝところ、どこにても、基督は、父子、夫婦兄弟、姉妹の間を仲よくせしめんために來り、その教訓を、神の掟として、おごそかに、説き示されたものと認められて居るのである。現にその一例は

基督を愛の君、平和の王

と申して居ることでも解る、基督は實に平和の君と稱せられてゐる。そのために斯の世に來り給ふた特別のお方だと一般に敬稱して居るのである。或は、その教へに従はんとして早まり過ぎたもの達が、絶對の平和主義、非戰論を唱へるに至つたことは、ひいきの引き倒しも見るべく、日本の基督信者の中にさへ、又そんな者がゐるのかと怪しまれ、嫌疑をかけられた場合さへあつた。その嫌疑をかけられた者のことは別とし、その米國等に行はれた平和の推理と主張とが果して正當であつたか否やは、私から申せば、論外の沙汰である、あまりに往き過ぎた、論理の常軌を超へた、根底の乏しかつたものであるが、然しながら、既にこんな影響を生じた傾向から察しても、基督が平和に眷々として、居られたことが解る、平和の普及を以て使命と

爲し、それに全力を注いでゐられたことは明瞭である。然るに、その反對に、基督が眉を揚げ

て
われ地に平和を投ぜんために來れりと思ふな、平和にあらず、反つて劍を投ぜんために來れり

と叫ばれたといふ、果して信すべきことであらうか。あるまいか、この時の基督の説き方は、何うしても、逆的であつたと思はねばならないのである。基督は、常にさう逆に説かれたと云へないまでも、往々、さうであられたとは云へる、然も、大切の部面に於て、しばしばさうであられたとは云へる、逆説的説明は、基督に於て一論法であつたのである。他の一例を擧ぐれば、次の如き句がある。

人、全世界を得とも、己が生命を失はば、何の益あらん

と説かれたのである、下世話にも、生命あつてのもの種といひ、誰も生命を大事に思ひ、生を重んじて、死を嫌ふのである。が、基督も、そんな意味で、私どもに現世の生命を重んぜよと教へられたものと云へば、こゝの意味は又決してさうではあるまいこの句の前の句は

己が生命を救はんと思ふ者は之を失ひ、我がために、己が生命を失ふ者は之を得べしとなつて居るのであるから、従つて、この意味は、人は皆、自分の生命を棄て難い大事のものと思ふてはならぬ。基督のためには生命を棄てねばならぬといふ意味になつて居るのである。されば、他の一節には、

人もし我に従ひ來らんと思はゞ、己をすて十字架を負ふて來れ

と説かれたことになつて居る、それ故、己れを棄てゝである、己が生命を棄つべく、先づ、十字架の耻の繩目を負はねばならぬ。そして、後を顧みず、眞一文字に、前に進め。進んで基督に従へ、さうすれば、生命が得られるぞ、凡そ、人が、生命を得るの途は、この一と筋途に限るのである。たゞそれ、この一と筋途に限るのであるから、生命を得んと欲するものは、先づ死すべきである、先づ死なねば生きることが出来ないものぞと教へられたわけになる。こゝに深い道理が有り相に察せらるゝことは勿論であるが、説き方としては、矢つ張り、逆な説き方と云ふべきであらう、順な説き方と云ふべきであるまい。私は、元來理窟家と友人の間に云はれてゐるが、理窟の本は常識である。私の理窟、私の常識の示すかぎり、斯の如き説明は、全

く、逆な説き方といふべきものだと思ふ。但、それ故にその趣意が解せられないとは決して申さない。それでも能く解ることは解るが、たゞ、その様の説き方であるといふことを、最初から大凡心得てかゝることが肝要であらう。

その心得でさへかゝれば、戸惑ふ節が少からうと思ふのである。

尙、基督教の特色を、最も深刻に代表するものとして、多くの人々に、常に用ゐらるゝところの句は、次の句であらう。

汝等の中に大ならんと思ふ者は、汝等の役者となり

首たらんと思ふ者は、汝等の僕となるべし

首は、かしらであり、上であるのに

その志の者は、僕の如く下つて下坐につけ、低い位地につけと曰はるゝのであるから、これもはてなと皆が、變に思ふ、句であるが、靜かに考へれば、そこに、萬重の眞理がある。さうでなくてはならないことが解る。さうさへなつて居れば、家庭は善く治まるのであり學校は善く引き締るのであり、社會は善く整ふのである、が實際にはさうなつてゐない所が多いから、吾

々は、内にも、外にも、八方に、今日の混亂と不安を見て居るわけである。

基督から、直接に、斯く教へられた弟子達の中にも、尙、大きい者とか、小さい者とか、上の者とか、下の者とかの、優劣の感、差別の情があつて、頗る八釜しかつた所から、彼等は、畏るゝ

天國に於て大いなる者は誰でせうか

と、伺ひを立てたのである。そのとき、基督は、幼児を呼びよせて、弟子達に示し、もし汝等謙りて幼児の如くならずば、天國に入るを得じ

されば、誰にても此の幼児のごとく己を、卑うする者は、これ天國にて大いなる者なりと教へられた、幼児は小さい者である筈、弱い者である筈、然るに基督は幼児が一番大きな者であるぞと説かれた。前段と照し合せて、如何にも逆な説き方だと思はざるを得ない。その他いろ／＼の例があるけれど、此の上、申さずとも、その傾向は、大凡、分られたわけ、私は、基督の教へを、深刻である、正理である、精嚴である、純真である、と認める。と同時に、人の常識に照しては、それは、概して逆な説き方であると認める、孔子の説き方に較べて、殊に

さう感ずる、想ふに、孔子は、人情を本として、斯の世の常の理を説かれたのである。孔子の着眼は、如何なる場合に於ても、斯の國を離れず、斯の君を離れず、斯の父母を離れなかつたが、基督の場合に於ては、それは、常に斯の國を離れてゐた、斯の君を離れてゐた。又、斯の父母をも離れてゐた。斯の世のことは、斯の世のことである。斯の世の人達にまかすとして、基督は、一圖に、神の事を説き、天國のことを説かれたのであるから、何うしても、斯の世の人の説く、斯の世の常の理とは相反撥するところがあつた。相反撥しないまでも、すらりと適合しないところがあつた。

ある時のこと、弟子達は、基督に告げた。

あなたの母上と兄弟達は、あなたに物を言はうと外に來て立つてゐる

そんなことが已に不人情である、それに對して基督は

わが母とは誰ぞ、わが兄弟とは誰ぞ

誰にても天にいます我が父の御意を行ふ者は、即ち我が兄弟、わが姉妹、わが母なり

誠に、理窟つばい答へ方をせられた、理窟はさうかも知れぬ。が、人情が與みしない、然しな

がら斯く思ひつめて居られた基督は、憊、いよ／＼十字架上の斷末魔に迫つたとき

イエスの十字架の傍らには、その母と、母の姉妹と、クロバの妻マリヤとマグダラのマリヤと立てり

イエスその母とその愛する弟子との近く立てるを見て、母に言ひ給ふ

「をんなよ、視よ、汝の子なり」

また弟子に言ひ給ふ

「視よ、なんぢの母なり」

この時より、その弟子、かれを己が家に接けたり

こゝになつて見れば、これが、また、眞理のやうに思はれる、眞理のみでない、人情の極致のやうに思はれる。基督は、家を構はず、家庭、父母、兄弟縁者のことを思はず、それらは投げやりにして顧みない不人情の方ではあらなかつた。その方面のことにも相當深く心を用ゐ給ふて、その結果は、父母、兄弟達のことをば擧げて、弟子達に託し給ふたのである。弟子達と家族達との關係を同等不可分に視て

「あなたの子供はこの人達である」

「君達の母上はこのお方である」

と双方に申し聞けられ、そして、心置きなく斯の世を去られたのである。これは、基督ならでは出来ないことと謂へやう、が、同時に、道を以て世に立つ先輩士君子の間には、往々、有り得たことである、有り得べきことであるとも謂へやう。孔子の死なれたとき弟子達は、皆三年の喪を守つたと傳へられ、獨り子貢のみは、三年の喪を以て足れりとせず、墓畔に小屋を建て六年の喪を守つたと傳へられ、そして、その後、弟子並びに國人の、孔子の徳を慕ふ人達が、墓のほとりに集まつて住つた者が、百余家を越へて、そこを孔里と稱するに至つたとある。事實、斯の如きは、基督の、その弟子達に示された教理に叶ひ、理法に合したものであらう。

さてこそ、基督の教への説き方は、時として、逆説の如く見えても、その教理は決して逆理でなかつた、栗の外皮には、鋭いとげに満つて居て、それを捉む者は皆傷ついても、その中味にはまた別段の旨味がある。逆理の如く聞ゆる基督の教訓の中に、永久の眞理を發見し、それを琢磨して、人生をいよ／＼靈的に深め高からしむることは、吾れ人ともに努むべき人の世の

務めであらう。

第九 大いなる者は役はるゝもの

(クリストの教訓と母の愛)

何人も母を懐かしむ、私も、人の如く母を懐かしむ、それは御互に萬人の變らぬ情であるが時としては、私は、私のは別であらう、萬人以上かも知れないと思ふ場合すらある。それも亦萬人の共通かも知れない。

が、私の母に關する懐かしみの深さは、特に、クリストの訓へに歸因するところが深いのであるから、こゝにそれを挿入する。

私は、聖書を読み出した初めから、これはいゝ教へだ、誠に高尚な訓へだと感服し、直ぐ、それに囚はれて了つたのであるが、同時に、これは、餘りに高尚にして實行し難い教へだと畏縮した、その一に次の如き話があつた。

弟子達が、自分等と友達との關係を持出して、クリストに對し。

いく度まで、友達の罪を赦すべきでせうか、七遍位までとせうか

と問ふた、それに對し、クリストは

七遍どころでない、七遍を七十倍せよ

と答へられた、私はそれを讀んで思ふた、七遍を七十倍、七々四百九十遍、あゝ、際限のないことである。際限もなく赦さねばならぬといふことである。そんなことが私には出来るだらうか。出来ない、私はクリストの弟子にはなり得ないと。

さりとして、クリスト教を抛つ氣にはなれず、以上の教へはしばし私の胸に來往してゐた。

一日、早稻田大學、當時の専門學校からの歸りがけ、牛込喜久井町の邊であつた、思ふともなしに

母上の姿が、電の如く、私の頭上に、きら／＼と閃めいた。

その時、母上は郷里の大村——長崎縣——に在したのである。その姿が、きら／＼と私の頭上に閃めいた刹那、あゝ、母上は私の罪を、七遍を七十倍まで赦して下されてゐたのである。七

十倍どころでない、無日／＼無際限に赦してゐて下されたのであるとの端てしもない追懐の感にヒタと打たれた。

そして、以上の難問が、その刹那に直に解けたのである。歡喜に躍つて、その日の足の歩みは殊に軽かつた。

それと同時に、次の難問も亦さら／＼と解けた。

甲、クリストは、この世を去らんとする數日前、弟子達を集めて共に晩食を取られた、その食事の後、

上衣を脱いで起ち、手拭を取り、盥に水を盛つて出で、

弟子達の足を洗ひ、

吾れ模範を汝等に示す、汝等も斯く互に足を洗ふべきである。

と申し渡された、成る程、これも亦立派な、いゝ教訓に相違ないが、偕、私に、斯の如きことが行ひ得らるゝであらうかと願ひて、到底出來ないことだと思ひ諦らめ、久しい惱みに陥ちてゐたのである。

乙、クリストの弟子達が、世の常の人の如く、立身出世、この世の功名にあこがれたことは勿論の情であつたらうが、一人の母は二人の子供をクリストの許につれて來て

この子供を、一人はあなたの右に、一人はあなたの左に——あなたの御國にて——坐せしめ給へと願ふた。

これは、いづれの母にも有り相な願ひである。クリストはそれに答へて、

異邦人の君が、その民の上に權を執ることは汝等の知る所であるが

汝等の中では、然してはならない

汝等の中では

大いならんと欲ふ者は、汝等に從はるゝものとなり

首たらんと欲ふ者は、汝等の僕となるべし

と訓へられた、これを聞いた弟子達が、當時、如何に思ふたかは知らぬ、私は、前段の訓へと共に、深く感心はしたけれど、なか／＼、實行し難いことである。殊に、勝氣の強ゐ、横着者の私として、こんなことが、何うして出來るものかと、その實行を疑はざるを得なかつた。

そして、遂に、何うして、その疑ひを解き、迷ひを轉じ得たかといへば、前段の、閃めきの中に現れ給ふた母の姿である、母の生活振りである、母の徳である。七遍を七十倍せよの訓へを、その實行の模範を以つて解いて下された母は、それと同時に、又、よく以上の難問をも解いて下されたのである。

それは詳しく述ぶる必要はない、各家庭に共有の事實であるが、念のために記して置けば、略ぼ次の如くなる。

母上が、家庭の女王として、家族的尊者の中心であられることは申すまでもなからう。日本では、割合に、女性を卑しむといふけれど——西洋にくらべ、支那にくらべて——それでも、母親が、各家庭を通じて、その中心であられることは確實である。が、母親は決してその尊威を振り廻して居られない。尊威は些しも振り廻さないで、そして子供等のため、勿論、家庭全體のためであるが、主として子供等のため、年がら年中、日々の日の絶え間なく巡るが如く働いて居られる、働かされて居られる。クリストの言に従へば即ち役はれて居られるのである、私は、こゝに子供等のためと申したが、實は、下男、下女等のためにもである、それら

の者のためにも役はれて居られるのである。變なことを言ふと思はるゝか知らないけれど、奥様が、夜ふかしをして、朝寢をして、中を外に遊び暮してゐられては、下女、下男達は、有効に働かない。下女、下男達を有効に働かすためには、奥様が先に立つて、自ら、まめに働かゝることが必要である。奥様は、當然に、下女、下男達に役はるゝものとなられねばならない。斯くてクリストの言は本當である。家の中で一番大きなお方であらるゝ母上は、家中の大小、上下、すべてのものゝためすべての者に役はれて居らるゝのである。

轉じて足を洗ふことに就ても一例を擧ぐれば、

私の家は、近所の子供の集會所となり、十人ばかりの仲間が集まつて、手習ひをし、讀書をする所であつた、つまり寺小屋とか、塾とかいふべき格の家であつた。

その子供達と、私も一緒になつて、庭にとび出し、裸足になつて、角力を取り、走りくらをし、時にはなぐり合もした、そして、時間の過ぐるのを忘れた。

その頃合を見計つて、母は、皆の者に、もうやめて上れ、上つて手習ひをせよ、本を讀めと促がされたのである、そして、その上れと命ぜられた、母は、

十人ばかりの子供に、さあ、足を濯つてあげるから、出さない、椽に腰かけて、待つて居なさいと命じ、自ら、盥を運んで、水を充たして、一人／＼の足を、泥だらけになつて居るそれを、時としては、十人以上のをも洗はれたのである。

私は、能くそれを覚えて居る、それは、丁度、クリストが爲された所の通りであつた。

考へて見れば、それは、私の母が、近所の子供の足を、さうして洗はれたのみでない、私もまた近所の叔父さん叔母さん達から、いくたびか洗つて貰つた、人は忘れてはならない、幼児を顧みれば誰でも皆この経験を有つて居るに違ひない。

斯の如く、それは、皆、家庭の母上の、身を以て實踐して居られる所であるが、所で基督教に就て思へば、この二者は、即ち基督教の根本の要領である。その主なる徳操である、想ふに、クリスト教の中には、今後、時代の變遷と、もに次第に薄れゆき變りゆく部分があるであらう。あるかも知れない、然しながらこの思想とこの徳業は、いつまで経つてもますますその光彩を發揮するばかり、永久に變る時はないであらう。

(一) 汝等相愛せよ、己れの如く隣りを愛せよ

(二) 大いなる者ほど人に役はるゝものとなれ

偉なるかな、美なるかな、斯の訓へ、天地は失せん、この訓へは永久に盡きまい。

私は、これを聖書に學んだ、限りなくこれに感謝する、然しながら、實は、母上の實踐の徳に由つて、夢が醒めたのである。惑ひが解けたのである、辛ふじて、これを理解し得たのである。私は、限りなくこれを我が母上に謝さねばならない。

私の母は、読み書の達者なお方であつた、私は日々の新聞を能く母のために讀んだ、母はこれを一日の樂みとせられた、私に於てもこれは一日中の樂みであつた。

右の如くにして、聖書の幾分を解した私は、實に、母に由つて神を見出したものである。

母若し在さずば、在さぬといふことはない、若し導き照し給はずば、私は、神を見出し得なかつたであらう、神をまさしくと領解し得なかつたであらう、神の懷ろに、素直に、なだれ込み得なかつたであらう。

私の解する限りに於て、母は、神に最も近いお方である、斯の世に於て神に最も近い徳を具へ給ふ者は母である、家々の母である母の徳を引き伸ばして、更に清くし、高くし、大きくす

れば、殆んど神に達する、神を見んとする者は先づ母を見るべきである。能く母を見る者は、大凡、神を見ることが出来る、この點に於て、使徒ヨハネが

既に見るところの兄弟を愛せぬ者は、未だ見ぬ神を愛すること能はず、神を愛する者は先づその兄弟を愛すべし

と言つたのは本當である。吾等は先づ見る所の者を愛せねばならぬ、神の雛型は母である、吾等は神に事ふる如く母に事へねばならぬ。

クリスト教は親を愛しない教へだと誹られた、私は、方々で、その非難を聞いた、私の行ひには、嗚、その様な缺點が多かつたであらう。人は言はれずとも、私はそれを知つて居る、が、基督教はさうでない、私は、聖書の中に神として母を見出したのである、母は神の中に神の如く輝いてゐ給ふ、聖書を読んでからの、母の一層の尊榮であつた、同時に神の一層の尊榮をも會得したのである。私は、不孝の子であるが、クリスト教は決して不孝に陥るゐるの教へでない。

あゝ母上逝き給ひてより既に三十三年、私は、この文字を草する時、私の蒙昧の目を見開い

て下された母上の靈光に對し、改めて新に感謝の祈りを捧ぐる者である。

昭和十四年北京に到つた時、侯朝宗氏に招かれて、救世新教の禮拜に會した、後、それに關する解説の書を惠まれた、中に次の詩があつた。

一

備人間に向つて佛道を求むるも

如かず誠心双親に孝なるに

双親即ち是れ西天の佛

何ぞ必ずしも深山遠處に尋ねん(何仙)

二

佛即ち心心即ち佛

如來常に汝の心頭に在り

既に知る想像の眞佛に非ざるを

識るべし心思の由る所あるを（観音大士）

何仙、観音大士は、仙佛の名であつて、或る方術に由つて招かれて降臨し、詩を賦し畫をも描かれたといふのである——その法身は目に見えない——この一二の句は、それに現れたものと云ふことになつて居る。

x x x

こゝに、母と書いて、父と書かなかつたことは、私が、母を慕ふて、父を慕はず、父のことをやゝもすれば、おろそかに思ふてゐたといふわけでない。

前に述べた如く、理解になやんだ聖書の訓への徳が、概して、母の徳に近く、母親の平生行ふて居らるゝところは、概してそれであつて、そして、母親のこゝろ、母親の生活は、全くその訓への通りである、そつくり、そのまゝであると感悟したのが本で、私は、その當時圖らずも、「お母あさま」と叫んだのである、それをそのまゝに記して、感謝するに他ならない。

又、従來の書き物には、父と書いて母を略し、父の中に母を含め、父を以て母を代表せしめ、父母の總稱と爲した場合がしばしばあつた、成る程、それで差支へないわけである。

私の、この場合の書き方は、それを入れ代へたことになる、母の中に父を含め、母を以て父をも代表せしめ、父母の總稱といたしたのである。私は、勿論、父を敬しました、父嚴にして母慈、父母の性は、大凡、斯く分るゝものでありませうが、同時に、凡そ人の子の、父母に對しまつる、懐かしみの情は父母に由つて差等は無いやうである、無い筈のものである、宗教の性は、父の嚴よりも母の慈に近い特徴がありませう、前に申した、母の性、母のこゝろ、母の徳、どこやら、それが、似つかはしい、相應はしいところがあるやうに感ぜられる、これ私が、その昔、頓に感悟せしめられた當時の光景につれ、宗教上の話となれば、毎々、母のことを語つて居る所以である。

第十 クリストの生涯に關して

私が、クリストの生涯に關して、いろ／＼の感激を覺えたことは勿論である、これは、萬人共通のことであらうと思ふて居るが、殊に、私は、その生涯の高さと低さとに感服いたして居る、高さに於て、その生涯は、前古未曾有のものであつた、如く、低さに於ても亦前古未曾有

のものであつた、怕らく、將來に於ても復たと見るべからざる超越した絶對のものであらう、と信ずる。

一 その低かつた方面

(一) 第一に、彼は、旅の途中に生れた、しかも、場所もあらうに、馬小屋の中に生み落され給ふたのである。泊るべき宿屋がなかつたからだといふ、吾等の中、誰か、一人でも、生れて、最初の眠りを馬槽の中に過したものがあろうか、私の知る限りに於て、そんな人は一人も無い。

(二) かくて幾日か、日數のたゞぬ間に、彼は、エチプトにつれて往かれた、人目を避けて、夜の間につれて往かれたのである、理由は如何様にもあれ、近所の人達は、彼等を夜逃げした、宿無し、落う人、さすらひ人の顔と評判したであらう、馬槽の中に生み落されて、夜逃げをした、この一事、クリストの赤ん坊の境遇は略ぼ察せられる、惨めさ無類であつた。

(三) そこに、私の邪猜をはさむ、ヨセフ——クリストの父——は何と言ひ、マリヤ——クリストの母——は何と言はれたにせよ、未だ結婚式を挙げなかつた彼等の間である。その間に生れたクリストに對し——東方の博士は、來つて無上の敬意を拂つたにもせよ、——近所の人達の口には、戸は閉てられない、彼等は、卑しみの目、疑ひの目をそば立て、クリストを、てなし子、不義の子と侮り辱しめたであらう、彼を携へて夜逃げをしたのは、これが其の理由でありはしなかつたらうか。

(四) そして、其の後の生活はといへば、狐には穴がある

空の鳥には罅がある

されど人の子は枕する所なし

と述べられた通り、事實、そんな暮しを爲された折もあつたのである、東奔西走煙突の黒くなる暇のない程に、轉々して忙がしく暮されたといふことも、その半面の事實であつたらうけれど、そればかりでなく、空の鳥にくらべ、狐にくらべて、身の廻りの寂しさを嘆せられるほどに、家もなく、食べ物もなく、着物もなく、世話してくれる人もなく、楽しんで語らう友もな

く、詫しい、逼迫かちの、暮しをせられたのであらう、私どもの間に貧乏に暮して居る者は幾人もあるが、然しながら、クリストの如く憐れな暮しをした人は幾人あるまい、断じて一人もあるまい。

(五) 斯の如く詫しく生活されたクリストは、どんなにして死なれたかといふと、それは、云ふまでもないこと、十字架の辱かしめを受けて、死なれた、人間に罪はいろく、多いといつても、磔殺の刑は有ゆる刑の中の極刑である、これほど、むごい死にかた、又、いやがられ憎まれる死にかたは有るものでない、それを、弟子達は誇る、誇るべき理由、特別の光彩はあつたにしても、當時の多數の人達が、この死を詛ふて、辱しめたことは、固より察せらるゝのである。クリストは、人の死の、最低最悪の死を遂げられたお方である。

(六) その辱しめは、死なれた後にまでもつゞいた、曰く、彼は、詐り者であつた。

彼れ詐り者の(或は惑はす者)生きて居つた時、

吾は、死んで三日の後に甦ると曰つた

それ故に、番兵をつけて墓を固めしめよ

である、當時の人達は、かほどまでに彼を嫌つて、彼を卑しんで、彼を窘しめたのである。

私は、曾て、争ひはこの世の限りと歌つたことがある、死んだ人に對しては、誰も皆優しい氣持になり、在りし日の恨みを忘るゝものであるが、クリストは、斯の如く、死んだ後の日までも毒々しく、嘲けられ、罵られ給ふたのである。

世に、クリストほど、悲惨な、八方塞がりの活き方、死に方を爲された人は、他に無かつたと思ふ、そして、それは、將來も決して無い例だらうと思ふ。

それ程、クリストは、身を以て、人の世の最低の生活、憐れな極度の生活を爲されたのである、私は思ふ、クリストの生活は、人間の生活の淪落の極度である、その淪落の極度を示したものである。古今幾百十億人、凡そ人は、皆クリスト以上の生活をした、一人もクリスト以下の生活をした者はない、そこで知るのである、クリストは、その生と死とを以て、人間の淪落し得る極度を示し給ふたのである、されば、人間は如何に淪落するともそれには限度があつて、他の人は總てクリスト以上の生活を爲し得るのである、決してその以下に落ちるものでないと、身を以てその限度を示されたのである。私も亦クリスト以上の生活を爲し得ること請け合ひ、

それはクリストが保證をして居て下さると、私は、斯く解するに至つた時、私の生涯に對する一切の憂悶は解けて、打つて換つたすがくしい氣持になつたのである。

二 その高かつた方面

前段に掲げたのは、クリストの生涯の、低かつた、卑しかつた方面である。

讀者の中には、私を咎めて罵られる方があらう、何たる無禮な悪すれた書き方をするものぞと、

私も、それを恐れぬではなかつた、さりながら事實は事實である、何人も以上の事實に目を蔽ふ者はない、蔽ふべからざる記録が存するからである。私は、寸毫も、それを誇張し、捏造したのでない。

こゝには、クリストの生活の高い方面のことを略記する、相駢べて、クリストの生涯の、特別無比なる實相を視んとするのである。

(一) 第一に、その生れられたとき、天の星は輝いて、東方の博士達の道しるべをした、博

士達は、疑はずして起ち、乳香、没薬など、最も貴重の祝ひ物を備へて、希望と歡喜の間にも知らない長途の旅路に就いたのである、古今幾百億の子供の生れたとき、斯の如く敬はれ、喜ばれた誕生が、復たあつたであらうか、

(二) それのみでない、その誕生は、早くも國王の注意する所となつて、

往いて嬰兒を見る、

還つたら自分にも語り聞かせよ

自分も往いて嬰兒を拜したいから

と申されたと云ふ、それには、何か良からぬ企みがあつたのだといふが、それにしても、何にせよ、寒村僻落の大工風情の貧兒の誕生である、それが斯の如く、國王、祭司長等の問題の種子となつたのは不思議にも程がある、クリストの生涯は、そもくその誕生初めから奇しき尊榮に満ちてゐられたのである。

(三) そして、教へを垂れ給ふたとき、民衆は、群を成してつき隨ふた、これも不思議である、彼は大工の子であつて、村の者たちは、その家筋を能く知つて居る、それにも拘らず、彼

の至る所、山の上にも、海の果てにも、荒野にも、街頭にも、朝早くも、夜おそくも、群集はつき纏つて離れず、列を正して教へを聞いたとある、そして驚いて

その教へ方が、學者の如くならず

權威あるものゝ如くあつた

といふたことになつて居る、その後、僅に三年のみ、天下は早くも風靡されて了つた、無類のことでないか、たゞ嘆仰するの他ない。

(四) その通りだから、その一行の人氣といふものは偉かつた、見物人は近づかんとしても近づけず、何うかして一と目なりクリストを見んとして、屋根の上に登つたり、木の上に登つたり、木の上から這つて落つこちたり、屋根を踏み破つて壊したり、怪我したり、大騒ぎをしたものといふ。

それのみでない、その行かるゝ途々には、木の葉を敷き、また着物を脱いで敷いたりして、手の届く限り路を綺麗にし、その通行を平かにしおごそかにし、敬意の限りを盡したものと云ふ。

それがたゞ一介の平民のためであつたから驚く、王室や、國家の何等の權威を借りたものでなく、長劍や、高帽等の威嚴を装ふたものでなく、すべては、人民の至情から自然に湧き出でた歓迎、尊榮であつたといふから驚くべきである。

(五) そして、十字架にかけられて死なるゝ時にも、勿論一點の怯びれた風情もなく、愁ひに沈まれた様子もなかつた、平然、母上等と弟子達を呼び寄せて、先づ母上に向ひ、

お母さん、この弟子等が、あなたの子供である彼等は能く介抱をしませうと告げ、次で、弟子達に向ひ

この母上が御身達の母上である、能く介抱しなさい

と告げ、やがて、一杯の葡萄酒に咽を沾ほして、(これが今日の慣例の源となつたものであらうか)

事畢れり

と叫んで首べを垂れられたとある、成る程、死に克たれた人である、死生の外に超然脱出して居られたお方である。全く特異の生活であつた、不思議の魅力と氣品との脈々として逼り来る

を感じずには居られない。

(六) 更に一事を加へたい、キリストと共に十字架にかけられた二人の泥棒の中、一人の者は群集と共にキリストを見やつて嘲つてゐたが、一人の者は神を崇むる本然の心に立ち還りてキリストに向つて心を寄せ

あなたが、御國に入り給ふとき

私のことを憶へて下さい

と頼んだ、殊勝の心がけである、それに對し、基督は

我れまことに汝に告ぐ

汝は今日我と共にバラダイスに在るべし

と告げられたとある、自分が十字架に殺されつゝある、苦しみは餘所にして無智極悪の見知らぬ者が無智極悪のまゝに死んで往くことを憐まれ、最後の一呼吸にも、生命の教へを彼に吹き込まれたといふところ、實に測り知られぬ愛着であり、ゑらい信念力であり、また榮光であつた。

私は、これらを以て、人生最高の生命と視る、實に、人生に復たとなし尊榮至極のものと視る、そして、人生は進んで／＼果てしない進み方を爲し得るものであるけれど、然しながらそれにも限度がある、人は如何に進んでもキリスト以上には進み得ない、キリストの生涯は、低さに於て人生の限度を示した如く、高さに於ても亦その限度を示したものであつた、人生は如何に落ちてもキリストの生活以下に落ち得ない如く、如何に昇つてもキリストの生活以上に登り得ないものである、然り、高きもキリストの生涯が極を示して居る、低さもキリストの生涯が極を示して居る、人生の高さの極と、低さの極は、共にキリストの生涯の中に包括されてある、キリストの生涯がその極である、その極を標示して居るものであると思ふに至つて、私は純朴なるキリストの弟子となつた。

三

私が、論語をあがめつゝも、聖書をあがめ、孔子を信じつゝも、より以上にキリストを信じて暮しつゝある大體の心事は、上述の次第で略ぼ明かになつたと思ふが、然し、私が斯く思ふに至つた由來と曲折とに關しては、尙少しく書き添へて置くべきことがある。

私は、歳十八、初めて東京に出たとき——その前、小學校の初め一年ばかり東京にゐたことがある——周囲の生活の放縱振りを見てぞつと致した、斯の如きを、墮落、腐敗といふのか、それは私には能く分らなかつたけれど、兎に角、放縱であり、不規律であり、亂暴であつたら、私はそれを見て、私もその中に住はねばならないものなることを思ふて寒心に堪へなかつた、そして、何うかしてそれに陥らぬ様にしたと警戒した、その時、讀んだのが聖書である、それは偶然にして讀んだのである、その時まで私は聖書といふものゝあることをも知らなかつた、従つて、その中に何が書いてあるかを、聞いたことも無かつたのである、それに、何うしてその聖書を手に入れたかといへば、私の主人の家に——私はその玄關番をしてゐた——聖書があつたのである。古くから有つたのでない、その頃、主人に近づかんと、たまたま、尋ねて見えた牧師さん——小崎弘道氏——から贈られたのである、それが奥座敷の本棚の隅に置いてあつた、主人はほとんど讀まれなかつた、それを私が請ひ受けて讀んだのである——最初には偷み讀をした——そして、私は、上述の如く、クリストの生涯は、人生のどん底である、人は皆、それ以上に生き得るものであるとの信念を得、漠然ながらも前途の見据がつき、やゝ

安心を克ち得るに至つたのである。

それは、決して、空想でなかつた、寧ろ確實な事實であつた、と申すわけは、私は生れた時、新しい布團の上に寝せられたのである。馬槽の中に寝せられたものでない、私は近所の者から、不義の子、私生の兒として、嘲けられ、からかはれたものでない、先祖以來の、郷土に生み落され、落ち着いて住ひ、相逢ふ人達から、格段に愛せられ、敬はれて育つた、決して、夜逃げ、落う人、他郷の空に漂浪の生活をした者でない、されば幼年の生活に於て、私は、既に已に、クリスト以上の生活をしたものである。

その以後のこと、自ら働いて暮す時代になつても——既にクリスト信者の名を冒してゐた、その時代に入りかけてゐた——私は、曾て豊かな収入を得た経験はないが、又、そんな収入を得たいと希望したことも有りはしなかつたが、今日までの暮しは、何うにか、かうにか、太した難儀なく通して來た——選舉の時など友人の世話になつた、——それを思ふと又たしかにクリスト以上の暮しである、クリストは、枕する所なく暮されたに對し、私は、畏れ多いほど果報の暮しをした者である、何うして斯様に果報に暮すことが出來たのかと、顧みて窃に恐縮に

存じ、ひたすら耻ぢ入つて居る次第である。

その故であらうか、私は、今日の生活に、存外、無頓着である、無頓着でないにしても、悠々として迫らない所のものがある、それは貧乏の間にも、「かね」があるといふ意味でない、「かね」はない、一圓の融通にすら窮する所があるが、感謝して居る、屈託してゐない、屈託しないで此の間に處し得る悠々の思ひを感謝して居るのである。

何にせよ、基督に恵まれた、少くとも教へられ、力づけられた、私は、感謝の足らざるを覺える、折に觸れて感謝して居る。

四

こゝに附け加ふべきか、否か

昔から、貧乏者は、金持に諂らふといふことがある、また、金持の者は貧乏者に高ぶるといふことがある、それが、人生の不満の本、不幸の源であることは言ふを待たない。

そこで、孔子の弟子は、それを研究の舞臺にのぼらせ

貧乏で諂はず

富んで驕らないなら何うでせう

それなら立派と——満足——謂へませうか

と問ふたのである、私は、これは、實に、いゝ問ひである。萬人の間はんと欲する所を萬人に代つて問ふてくれた奥行の深い問ひであると感服いたしましたのであつた。

孔子はそれに答へて

それは、いゝ實に、いゝけれど

貧乏で楽しみ

富んで禮を好む方がそれよりもつといゝ

と教へられた、成る程、これは更にいゝことである、吾等は、それをも學ばねばならないと、感憤せしめられたのである。

が、その實際の工夫を思ふとなか／＼難かしい、貧乏にして諂はないことが既に難かしいのである、何うして其の上に乗れ越へて、貧乏を悔みないのみか、その境を楽しむことが出来る様になるか、富んで高ぶらないことが既に難かしいのである、何うして其の境に居りながらも、

謙遜にして、柔和にして、近所の人達と平等に付合ふことが出来る様になるかと、私は、その教へに感心するだけ、その實行の難かしいことを悩んだのである。

それらの惱ましい思ひは、後であつたか、先きであつたか、後先の混じた場合も絶えずあつたのであるが、聖書を読んで、前段の如き基督の生活を驚嘆し、且、その教へに次第に親しんでからは、私は、貧富といふ懸隔した事實の存在を、全く無視しないまでも、多く氣にかけない様になつたのである、これは、氣に懸けても駄目だと諦めたのかも知れないが、その本づく所は、矢張り、基督の生活に在つたのである、基督の教へに在つたのである、事實、基督の前には、ソロモンの榮華も、野の百合の花の榮華も一様であつたのである、そこには貧富の別はなかつたのである、古へより貧富の別ほど怖れられた事實はなかつた、然しながら基督ほどそれを無視し輕視せられた尊者はなかつた。

富る者の天國に入るは、駱駝が針の穴を通るよりも難い

誠に嚴肅なる宣言である、されば、富める青年が尋ねて來た時も、クリストは容赦なくそれに答へ、汝の富を賣り拂つて、裸一貫になつて來いと曰はれた、富の誇りを、容るべき間隙がな

かつたのである、貧乏の者は澤山ゐた、が、そのレプター一枚の献金は、富める者の惜み／＼の一萬金の献金にも優るぞと勵まされたのである、クリストの前には、富と貧乏とに由る上下優劣の區別は無かつたと謂ふべきであらう、論語の天地と聖書の天地とは、こゝに異なるのである、聖書には、論語で問題視せられた貧乏の事實が存在しないのである、存在しないことは、それを氣にするに當らないのである、論語を読んだときの私の一つの悩みは、こゝでも聖書に於てまた解けたのである。

こゝで、もう一度、基督の生涯をくり返すことを許されたい、前段の説明で、私の心境は既に盡して居るのであるけれど、尊敬のあまり、信重するところを、重ねて申すのであるが、基督は、その生涯を以て、吾等百千萬億の人類のため、富と貧乏の生活の限度を示されたのであるから、吾等は如何に貧乏してもクリストの貧乏以下に落ち得ない、如何に富み榮へてもクリストの榮へ以上に出で得ない、クリストの貧乏以下に落ち得ない者が何うしてクリストの前に貧乏を叩つことが出来るか、クリストの榮へ以上に榮へ得ない者が何うしてクリストの前に榮へを誇ることが出来るか、それは、そも／＼爲し得ないところである、喩へば春の雪のこと、

それらは、自然に消えて無くなるの外はないものである、そして、春の野の草木のごと、人生は無限に伸び／＼して往くのである、何人も悠容として暮さねばならぬ。

第十一 孔子の政治論

孔子は、また、政治家であられた、路に當つた實際の政治家であられたが、のみならず、それ以上に、民間者として深く想を練られた政治哲學者であられた、そして、その想は、古今に卓出して居る、多く類者の無いものであらう。

私は、この書の他の部にも、また、他の書にも述べて居る通り、孔子の政治思想を以て今後にも用あるものと思ふて居る、孔子は、言ふまでもなく、道行に於て天下の秀絶であり、それに由つて政治を行はんとせられたのである、若しそれが當時に行はれて居たれば、今日の如き豺狼肉を争ふ國際情勢は無いのでないか、無くなつて居るわけではないか。

私は、今日の英、米、獨、佛等の學者の中にも、孔子の政治思想の研究者のあることを知つて居る、料るに、西洋の政治思想の中に——實際政治の中にも孔子の思想の取り入れられる、

日は遠き未來であるまい、然しながら、孔子は、東洋の人として、先づこれを東洋に行はんとを期せられたのである、東洋の國民こそ、殊に、東洋の君主こそ、孔子の政治見地に就ては、先づ、要點を確保し、その施行の方法順序を、入念に、思考して、太過なきことを期せねばなるまい、其の本は支那に在る、私は、近年の支那が、やゝともすれば、孔子の道の研究を怠り、これを以て、過去帳の中に葬り去らんとするが如き傾向の既に一二にあらざること甚だ惜むものである。

そこで、若し、孔子が、志を當時に得られたら、何うであつたらうかといふに、私は、相當成功せられたことであつたらうと思ふ、現に、定公、魯の君主、孔子は魯に生れられた、魯は今日の山東省である——孔子を以て中都の宰と爲された、一年にして、中都大いに治まり、四方これに倣ふたとある、これは其の一例である、又、定公に相として、齊侯に逢はれた、時よく齊の非禮を斥ぞけて、魯の面目を保ち、威信を發揚させられたとあり、その他、いろ／＼ある、孔子は、たしかに政治家として、善き政治を當時に行ひ得られたであらうと思ふ、孔子には其の自信がたつぷり有られた、さればこそ、

舉月にして足る、三年にして成るあらん、長いことはかゝらない
と言明せられたのである。

然しながら、その國家なるものは、いづれも小國であつた、たゞ、それ、小國家であつたの
だから、當時に善く行はれ、善く治まつたからとて、今日の大國にも、善く行はれ得るとは保
し難いものがある、尤も、孔子は

大國を治むるは小鮮を煮るが如しと

曰つて大國を治むるにも用意のあることを示されたのである、その心持は善く察せらるゝが、
然しながら、今日の國家は統制國家と曰ひ、強制國家と曰ひ、將た、國防國家と曰ひ、國民を
して、國家の向ふところに嚮從せしめんとして居る、それだけ、孔子の理念とせられた手法心
計とは、大いに隔離して居るとは言はないけれど——中には相通するところもある——やゝ相
偶せぬところがあるのである。

かたゞ、孔子が、當時の小國に施して好成績を擧げられ、また、終始、小國の君主を相手
に講説し、計畫せられたところのものが、今日の大國にも適合してよく行はるゝのだらうかと

いふことには、幾分の懸念があるのである。

それでも、私は、尙その理念を一言して置きたい。

それは、魯國に或る專横の宰相があつて、顛史といふ附庸の國を伐たんとした場合のことだ
ある、その時、孔子の言はれた説であるが、

丘や開く（孔子開くである）

國を有ち家を有つ者は

寡きを患へずして

均しからざるを患ふ

貧しきことを患へずして

安からざることを患ふ

蓋、均しいときは貧しいことなし

和らぐときは寡きことなし

安きときは傾くことなし

夫れ是の如し

故に遠人服せざるときは、則ち文徳を脩めて以て之を來す

既に之を來らせた時は則ち之を安んず

である、私は、これ在今日にも行ふに足る、そして、行はねばならない政治理法と思つて居るのである。

念のため中村惕齋の註釋を加ふれば

(均しければ貧しきことなし以下の部分に對するのである)

上下をの／＼分定まりて、平均なるときは

君主民庶、ともに足りて、財とほしき患なし、よりて上下の人情相和らぐ、人情やはらぎて、相そむくことなきときは、上たる人、民のすくなき患なし、よりて又上下の心相安んず、人心安んじて、あやぶむことなきときは、國家かたぶきやぶるゝの患なし、これより平均和安なれば、亦をのづから、寡く、貧しき、患なきことをの玉へり

である、中村惕齋は斯の如くこれを解釋して居るのであるが、當時は御世泰平にして、社會組

織が世襲的で、靜止的で、且、その根幹を爲す、士族は定祿を食んで、一生を君主にさしげ、些の恨みなく、咳やきなく、奉仕して居たればこそ、そこで、さら／＼と、

上下をの／＼分定まりて、平均なる時は

と書き下されたのである、こゝの論理が、自然に、時の事情にも合する様に解されて宜しかつたのである、それは實に宜しかつた、實に良き註釋であつたと謂ひ得るのであるが、但、孔子の理想はそれに止まらなかつたのである。もつと、大きなものがあつたと謂はねばならぬ、殊に、吾等今日の世に生れたる者に取つては尙更のことである。均しからざるを憂ふ、均しければ貧しきことはないとの定説は何としても大きいものである。

孔子のこの時の直接の相手は、冉有と曰ひ、子路といふ二人の弟子であつた、私の記憶するところ、孔子は、たび／＼政治のことを説かれた、弟子達も、王様も、お客さんも、しげ／＼政治のことを孔子に問はれた、然しながら、政治の原理を徹底的に説かれたこと、この問答の

如きところは、他にない様である。

されば、孔子は、何に感憤して、この哲理をこの時に説かれたものであらうかと察して見るに、

孔子は、魯の國、孔子の生れられた魯の國が、この時に當り、分崩、離析して大亂に陥らんことを患へられたのである、それ程の大亂が、足もとに迫りつゝあることに氣づき、これは容易ならぬこと、篤と宰臣等に注意し、その不注意、無自覺を責めねばならないと、深く憂慮せられたものだつたらうと思はるゝのである。

第一に、その顛臾は、魯の邦域の中に在る、先王の時代に、顛臾をそこに封ぜられたもので、そこは東蒙と稱して居るところ、魯の附庸の土地であり、顛臾は社稷の臣とも同視すべき格式の家柄である、それを何の理由で伐つのか、伐つべき理由が明白でない、正確でない、

冉有は、その理由を解して、顛臾の城が堅固で、費といふ季氏の——宰相の——本領の邑に近いから、危ふい、今、取つて置かないと、後世、必ず子孫の憂ひを爲すであらう、そのために伐たんとするのであると言つたけれど、孔子は、これを納れられなかつたのであ

るその理由は略する)

第二に、かく、明白の理由がないにも拘らず、社稷の臣とも同格の家を伐たんとす、乃ち、自ら好んで、

干戈を邦内に動かさんことを謀るものであるから(實に不心得千萬のことであるが)

吾れ——孔子自らを指す——恐る、季孫其の人の憂へは、顛臾に在らずして、蕭牆の内に在らう、

と言はれたのである、蕭牆は墀垣のこと、大臣、諸侯等の、屋敷の廻りを、結ひめぐらして居る墀垣のことを云ふのである、その意は、子孫百年の後のため、顛臾が仇を爲すだらう、と季氏は憂へて居る相だけれど、孔子の見らるゝ所では、憂へは外になくして、却つて内に在らう、遠くになくして尙近くに在らう、それは足もとに在る、目の前に在る、權臣駢び立つて、周の政治を恣まゝにして居る現状から、その充同伐異の弊が、國家を誤まり、分崩離析せしむるに至らんことを恐ると申されたのである。

然り、此の様の情勢に由つて、父母の國、魯國のことを憂へられ、この政治的大原理を指示

せらるゝに至つたのである、いづれの時代に於ても、黨同比周が、國家の大禍根である。

しからば、孔子は、何うして、こゝに述べられた如き政治を實行せんと期せられたかと云ふに、

孔子は、一にも人、二にも人、其の人存すれば政りごと存す、其の人存せざれば、政りごとのはれる道が無い

と曰はれた、

尙、政りごとは正である、君が身を以て、正しきことを行ふのである、君が正しきことを行へば、百姓がそれに従ふ、政りごとは君の爲す所で、百姓の従ふ所なり

とある、孔子の政りごとは、どこ／＼までも、君が先導者となつて模範を示し給ふべきものである、それは、小國にだけ望み得ることと謂ふに止まるまい、大國に於ても亦然りであらう。別のところにも述べた如く、孔子は禮を以て國を治むべしとせられた、私は、これを滋味の

ある教へと思ひ、何うかして、今日の世界各国がこれを行ふに至らんことを希ふて居る。

能く禮讓を以て國ををさめば何かあらん、(論語里仁第四)

その氣風心がけさへ確かであれば、國家を治むることは、格段、面倒の憂へは無いものぞと言はれたのである、そこで、弟子達が、おの／＼志ざしを言ひ合つた場合、子路が昂然として

三年に及ぶころには、其の民をして、勇あつて且方かふところを知らしめ得べし

と申したのを、孔子は笑はれた、後になつて、なぜ、笑ひ給ふたかと問ふた者に對し、

國ををさむるには禮を以てすべきものであるのに、其の言讓らず——その言不遜であつたといふ意味——それ故に笑ふたのだ

とある、その通り、孔子は、禮を以て國を治めんとせられた、禮讓は孔子の治國の方策の主なる、一端である。

それは、それ、それを推し盡して、孔子は、更に、祭祀のことに遡り祭祀の政りごとに切なる關係のあることを述べられた——別にも述べた通り孝經に

昔は、周公、后稷を——周の國の開祖——郊祀して以て天に配し、文王を明堂に宗祀して

以て上帝に配せられた、

是を以て四海の内、各その職を以て來つて祭りを助けた、——四海悦服して、諸侯來朝し、方物を貢獻したと註してある——夫れ聖人の徳、又何を以て孝に加へんや

と述べてあるが、こゝは、孝の徳を述べられたのであるけれど、同時に、その神明に事へられた結果、民の徳が厚くなり、政事が善く行はるゝことによつて、萬民が悦服したことをも併せて明かに告げられた記事である。

そして、論語には（八佾第三）

或ひと禘の説を問ふ

禘とは王者の大祭の名である、前に述べた郊祀の如く、天子が皇天上帝を祀らるゝ第一の大禮である

孔子曰く知らない（中村氏はこゝに註して仁孝の徳、誠敬の心、至極せる人にあらざれば行ひあたはざること故、或人の知るべきところにあらず、故に、斯く知らずと答へ玉ふたと申して居る）

と曰ひながら、つゞけて

其の説を知る者の天下に於るや、其れこれを、こゝに示す如くならんかと、其の掌——てのひら——を指し給ふたとある、

中村氏は、こゝの天下とは、天下を治むるの事なり、其の掌——てのひら——を指させるは、明かにして見易きを以て、天下を治むることの難からぬ意を示されたるなり、蓋、よく禘の説を知る時は、理明かならずと云ふ所なく、誠いたらずと云ふ所なし、天下を治むるほどの大事も、能くせざることあらんや

と解したのである、其の通り、神を祭り、神に事へ、神明を大切に畏れ敬ふ者の政治は、その誠心の感孚するところ、四海悦服して、政治が隅々にまで善く行き届くことにと申されたのである、乃ち、孔子の政治には、敬神といふこと、同時に、崇祖といふことが要素となつて居る。

論じてこゝまでになれば、孔子も亦彼の世の事を考へられたのである、基督の述べられた次の世の事を、孔子も亦念頭に置いて居られたことになるのである。

孔子のみならず、すべて政治の極は神明である、いづれの國にか神明に起因しない政治があらう、それは無い筈である、絶対に無い筈である。

私は、道徳を以て天下の秀絶と認めらるゝ孔子が、斯の如く、實際政治の道を、懇々として説かれたことを、特に、感稱せずには居り得ないものである、想ふに、今後の政治は、この方向に躍進するであらう、吾々は、それを躍進せしむべく努めねばならない者である。

第十二 孔子位地

—

基督信者の中には、私が、基督と孔子とを駢べて説いたことを以て、私の不明をそしり、或は、不倫の説を爲すものかなと罵しり、私は、未だ基督の位地と、志業と性格とを解してゐないものであらうと爲さる、方があるかも知れない。

私は、そんな咎めが起るかも知れないことを虞れないではなかつた。

が、基督の位地を知る人は世界に多い、孔子の位地を知る人は東洋にも少い、私は、それを

遺憾に思ふところから、少しくこゝに述べて置きたいのである。

—

孔子は、世の常の學者の如く、青白い、弱々しい、瘦せ形の人でなかつた。

第一に身の長け十尺——九尺六寸と書いたのもあると傳へられ、胸の廻りが廣く、肉づきがよく、堂々たる構への偉丈夫であられた、繪といふものが何れだけ眞を傳へて居るか疑問がちだけれど、吳道子の描いた孔子の像など——吳道子は支那の古今第一等の畫家と稱せらる——所謂容貌魁偉、鬼をも欺く姿である、後の將軍關羽の像などの遙に及ぶところでない、その、どつしり腰を据へて、坐られた形は、龍の蹲まつた形に似て居ると形容したのもあつた、左様に眺めて畏れられた風格の人であられたのであらう。

その手のひらも、格別に廣くて大きかつたから、虎掌と稱せられたのである。

自然に大力であられたものと想はれる、大きな關門を難なく推し開かれたとある、日本でも城門は重い、容易に開けるものでないが、支那の城門は更に大きい、だから、一人の力で推し開くことは、とても、不可能と爲されてゐたのを、孔子は、それを推し開かれたのである、然

し、あへて力を以て開かずとある、蒲子が、そんな大力のあられることは、一向、評判にならなかつた、たゞ、學問文章を以てのみ傳へられたのである。

尤も、智は襄弘に過ぎ、勇は孟賁を服し、足は郊菟を踏みつけ、力は城の關門を推し開く、能も亦多かつたのである。

と記した本もある。

學問は子供の時から師に就て學ばれたので、その師は一人に止まらなかつた、

十室の邑には必ず忠信丘の如きものがある——孔子の如きものがある——丘の學を好むに如かざるなり

と曰はれたこともあつて、勉強が、天性好きであられたのである、

されば、基督が生れながらにして知り玉ふたとは別で、基督の周圍の人は、彼が何處で學び給ふたかを知らず、基督の聰明多智なるを異しんで、彼は大工の子でないか、何うしてこの聰明の智識があり、且、權威のある者の如く、自信に満ちた教へ方をするかと不思議がつた程であり、尙、繪の表現によると、基督は瘦せ形の人で、中肉、中脊以下の人の如く見られたので

ある、兩者は、その知慧に於ても、形貌に於ても互に相異なつた、人であられただらう。

三

孔子は、前の如く學んで達せられた人である、その天資は固より聰明絶倫で、何事にも精しく通曉して居られた孔子に聽いた者の、いづれも、びつくりした所である。

韓詩外傳といふ書に由ると

魯の哀公が、人を備ふて井を堀られたが、三月かゝつても泉に達せず、水を得ない、却つて一つの玉羊を得られた、哀公はそれを懼れて、孔子に聽かれた、孔子の曰く、水の精は玉であり、土の精は羊であるから、此の羊の肝は乃ち土であらうと、哀公、人をして羊を殺さしめたところ、果して其の肝は即ち土であつた、

とある、何うして、こんなことにまで、能く通じてゐられたのであらうかと問へば、

吾れ少年のころ賤しかつた、

故に鄙しいこと——世間の俗事——にも多能である

と、これは孔子の自ら述べられたことである、又、

吾れ試みられず——國家に用ゐられないから——故に藝なり、それ故、藝事で出来て、多藝であるとの意、然しながら、

君子は多ならんや、多ならざるなり

といつて、その多能のこと、多藝のこと、を寧ろ耻かしいことの如く卑下して居られた、子貢孔子を評論した一節には

が、天縱の才なり

とある、天が、これを縦たかいまゝにせしめて居らるゝのであるとし、縦横、往くとして可ならざるなき天才であられる、鄙事とのみ云はない、俗事とのみ云はない、孔子は、勉強もされたであらうが、もと／＼天才の質で、何事にも精しく通じて居られると申したのである。

基督も、そんなお方であられたのであらうが、基督は、専ら天上の國のことを説いて、その國に入り得る者の資格、性情を教へ示されたのであるから、そんな、世上の細事、奇事、難事を説くに及ばなかつた、そんな記事は殆んど聖書の中に見えない、記録の存する限り、こんな事に關しては孔子こそ、殊に、多能にあられたやうに察せられるのである。

然し、絶えず學ばれた、何事に就ても學ばれた、孔子太廟に入つて事ごとに問はれた、實に一刻も空うせず、一事も忽かせにせられなかつたのである、それが孔子の日々の務めであつた、そして、

何の常師かこれあらん

と謂はれた、常師はなかつたのである、そして、廣く學んで、厚く脩めて、あの知らざる所なき聖人の位地に達せられたのである。

四

弟子達の、孔子を尊敬したことは、非常、無限大であつた、こゝに、その三節を述べて、盛徳の一斑を偲ぶこととする、無論、論語の中に記してあることである。

(い) 或人が、孔子の弟子、子貢をほめて、子貢に面と向つて、君は孔子よりもまさつて居るぞと褒め上げた、有り相なこと、世間では、よく、こんなやうな評論をしたがるものである。ところが、子貢はそれを聞いて申した、これを塀に喩へるなら、

子貢の塀は、肩の高さ位のものである、せい／＼、五尺か、六尺位のものであるから、

邸内の家敷の様子は、塀ごしに略ぼのぞくことができる、好さも、あしさも、狭さも、廣さも、塀ごしにのぞいて、見て取ることができる。

が、孔子の塀は數仞である、一仞は八尺といふ、それ程高いのであるから、中の様子は外からはのぞかれない、門から入つてゝなければ、そこにどんな美しい構への宗廟があるか、百官の備へがあるかは、見ることはできない、それらを見るためには、必ず先づ其の門から入らねばならないが、楮、其の門に入る者は寡い、君が、自分のことを——子貢のこと——ほめて、孔子のことを貶されたのは、門に入らないからである、そんな人達には、有り相な觀察でもあらうかと、冷笑したといふ。

私は、この塀のたとへを必ずしも中つた喩へとは思はない、何か別の喩へ様があつたらうと思ふ、でも、子貢が孔子を尊んで、その高風大徳を欣賛してゐたことは、この小話でも察せられる所である。

次の評論に至つては、一層、その精神を認める、

(ろ) 子貢が斯く説明したに拘はらず、或人は——その實、叔孫武叔、魯國の太夫即ち重臣

である——尙、孔子を毀つたので、子貢は申した。

已めなさい

孔子は毀るべき人でない、毀らるべきお方でないのである

他人の賢者といふは、丘陵のやうなものであるから、猶ほ踰ゆることも出来やう、

孔子は日月であらるゝから、踰ゆることは出来ないお方である

人、自ら絶たんと欲するとも——孔子の如き人は何うでもいゝ、絶つて遠のかうと、思ふにしても、——何ぞ日月を傷はんや、

多くは其の量を知らないのである

この評論は、成る程高い

(は) 同じく子貢の評で、前段と同類の嫌ひはあるが、更に他の人——實は、陳子禽——が、孔子を評したとき、子貢はそれに應じて

言葉は慎まねばならない

孔子の及ぶべからざることとは、猶ほ天の階して昇ることの出来ないやうなものである、

孔子が若し天下を治むる位地を得られたなら、

所謂、之を立てんと欲せらるゝ限りこゝに立つのである、

之を道びかるればこゝに行はるゝのである

之を綏やすんぜんとせらるればこゝに来るのである

之を動かさるればこゝに和らぐのである

其の生るるときは榮へあり

其の死するときは哀しんでつきない

これを何うして及ぶことが出来るものか、及びもつかない

と、その高弟等は、孔子を以て、天の如く高く、日月の如く明かなりとして、崇め尊んだのである。

基督の弟子達が基督を尊んだのは、その行はれた奇蹟の事實に本づくところが多い、盲人は見、足なへは歩み、癩病の者は潔められ、聾人は聞き、死人は甦へらせられ、貧しき者は福音を聴かせらる、弟子達が、驚倒して、崇め、尊んだのは、この事實に本づく、無理もないこと

ろであつた、然しながら、孔子は曾てそんなことを行はず、たゞ、諄々として教へられたとけであつた、そして、これ程の信用を受け、尊敬を受けられたのだから偉む。

この點に於て、孔子の道の榮へ方と、基督の道の榮へ方とは、互に異なるのであるが、その由來如何に拘はらず、支那四億の民衆が、孔子を仰いで百世の師と爲し、基督に劣らぬ尊榮をさげまつて居る心持は、頼母しい、そゞろに其の俗を重んじて、其の情を敬すべきであると思ふ。

五

支那民衆といふよりも、支那國家が、何の位も、孔子を敬ひ尊んで居るかの一例を次の祝辭を以て窺ふことにしたい。

祝辭は、日本に於て、「のりと」と申す所のものに當る、字は、同じ字であつて、字書には、

祭時、禱りことをさぐるの文である

と解してある。

祝とは、言葉を以て神に告げまつり、主人のために、福を祈るものである

とも解してある。

支那では、春秋二季に、孔子を祭る、首府に於ては、天子が親ら詣つて禮を行はるゝのである、毎年毎次、その親ら祭らるゝのことはなくとも、その時は、重官、大臣を擧げて、代つて祭らしめらるゝのである。

その祝辭には、昔から一定の辭があつて、たゞ、その重官大臣の名とか、年月日とだけが變ることになつてゐる。

その一定の祝辭は

惟師、德天地に配し

道古今に冠たり

六經を刪述し

憲を萬世に垂る

となつて居るのである、以上は、首都、先師廟に於ての祝辭であるが、地方ではこれと異なる、例へば、直隸省の文廟に於ての祝辭は

惟先師、德千古に隆さかんに

道百王に冠たり

日月を掲げて以て常行す

主民より未だ有らざるところなり

となつて居る、そして、顔淵と、子思と曾子と、孟子との四人を擧げて、復聖とか、亞聖とか稱し、孔子に配して祭り、その他、先賢とか、先儒とか、歴代の賢人名哲を——これを選ぶ會式は嚴正である——併せ配して祭ることになつて居る。

のみならず、孔子の先祖五代をも、裕聖王とか、昌聖王とか、啓聖王とか、稱して、崇めまつり、そのためには崇聖殿といふ特別の祠殿を設けて祭ることになつて居る、そして、この祭りのときには、顔子や、曾子や、孟子等の先代をも合せ配して祀る習ひであると云ふ。

そして、その祭りには、また一定の樂がある、昭平の章とか、宣平の章とか、秩平の章とか、叙平の章とか、懿平の章とか、徳平の章とか申し、文句は短いけれど、秀麗の句を集めてある、但、その句は中央と地方とに由つて又やゝ異なつて居る。

地方は、各省とも、各府、州縣に亘つて一廟づつあるわけである。

孔子は、我れ少にして賤しと、賤しい家に生れた様に言はれたのであるが、さうでない、父は、魯の國の太夫、奉行職をつとめられた方で、相當の家柄の家といふべきであらう、然しながら遂に百世に廟食して、歴代の帝王の上に祭らるゝことになられた、支那に關する限り、孔子の尊榮は、天上下、獨一無比である。

孔子の死なれた後のことは、別の所にも記したが、門弟子は皆三年の喪に服した。

獨り子貢のみは、それを以て足れりとせず、墓の側に小屋を設けて、凡そ六年の喪をそこに守つたといふ。

加之、孔子の徳を慕ふ人達は、四方から集まり來つて、そこに住むを求め、凡そ百餘家にのぼつたので、その邊一帶の地を則ち孔里と稱するに至つたといふ。

以て孔子の徳を知る、流石に百世の師であられたと、床しく感ぜられる次第である。

基督の墓は、三日の後には發かれた、彼れ詐り者、三日の後には蘇生へると稱したから、だから、番人をつけて守らねばならないものゝしい警戒が墓所にまで施されたのである。

今日は世界に評判のエルサレム、順禮者の跡は、一年から一年に殖へつゝあるにしても、當時の、誼ひと、誹りと、反撃の情は、語り傳へられて、凄まじいものがある、そして、弟子達の訪ひ來る姿は、寥々としてあと寂しかったものらしい、聖書の記するところ、それが絶えなかつたものだらうとは決して謂へない。

が、死にし者をして死にし者を葬らせよである、あとは振り返るべきでない、それが基督の教法である、鐵則である、さればこそ、

往いて天國近づけりと、宣べ傳へよ

と弟子達に命ぜられたのである、基督の遺訓がさうなつて居るのである、弟子達はそれを守つたのであつた

汝等往きて、もろくの國人を弟子とし、

父と子と聖靈との名によりてバプテスマを施し、己が汝等に命ぜし凡ての事を守るべきを教へよ

何としても大きい、先生の墓を守るべき必要は、基督の弟子達にはなかつたのである、それよ

りも傳道である、弟子達はそれに身を致した、各々殊力を盡した、そして、皆、相當の榮へを擧げた、今日の成績がそれである、基督の位地は特絶であつた。

が、それ故に、孔子の地位を卑いといふべきでない、天には天の榮へあり、地には地の榮へあり、地上の道を説いた人として、孔子の位地は、矢張り、古今に冠絶してゐた。

そして、兩々對し來つて、各々長所を見る、人間として見る限りは、いづれにも、短所、僻所がないとはしない、要は、學ぶ者の心得方如何であらう。

第十三 基督の特絶の位地

—

例へば、平野を度るやうなもので、どちら向いても、平々凡々、何等の奇を見ないのが、孔子の生涯であり、教へであり、理念であらうと思はれる。

孔子を過ぎて、基督に至れば、光景は一變する例へば、深山に入り、幽谷に入つたやうなもので、見るもの、聞くもの、悉く目を驚かし心を騒がすの資料たらざるはない、茫然、凄然、

應接の暇がないといふ感じがする。

それ故、基督の生活位地は、全體として、吾等一般人からは懸絶せる無類不可思議の塊まりといふべきであらう、たゞ、それ不可思議であるから、何と形容し名状すべきかを知らない。

吾等は皆生活に「あくせく」する者である、それが人生である、生活に「あくせくしない」人生はない筈である、然しながら、基督の生涯には、些しもそれらしいものはなかつた、基督は生活に「あくせく」されない特異の生涯を送られたのである。

その生涯は、僅に三十三年、孔子の七十三年にくらべて甚だ短かつた、それも、傳道のこと直接奔走せられたのは、僅かに終りの三年だけである、その前の三十年間は、大工の家業に手傳はれたものであらうけれど、それさへ手傳はれたものか、手傳はれなかつたものか能く分らない、何うして食はれたのか、何うして衣られたのか、それも、食はれたものか、衣られたものかさへ分らない、或は食はれなかつたのかも知れない、着物は着のみ着のまゝ夏も、冬も、一枚で打つ通し、一枚で一生を着通されたものかとも思はれる、つまり、吾等とは、全く調子の異なつた異類の生活を送られたのである、もと／＼天上の人、地上に於ても天上の生活を爲

されたのだらうから自づと異なつてゐたものであらう。

二

吾等の生活は、何物かを他人以上に、成し得れば他人の追ひ付き得ない發展を求むるものである。

そのためには他人を押し除けることをも厭はない、他人を押し除けて、他人を乗り踰へて、獨り自我の慾を遂ぐることを、則ち人の普通の生活といふて居る、勿論、兄弟や、姉妹は仲よくする、協力をする、が、一般は、こゝに述べた如き法則の下に、てんぐ、ばらく、血眼になつて、行走し、奔競して居る、そして、幾分なり、他人に増して收め得た、克ち得たものあつた時、天晴れ、勝利の生涯だと誇るのである。

そのためには、泥棒することもあるのである、姦淫することもあるのである、人を殺すこともあるのである、大きく言へば國を奪ふこともあるのである、斯くして取り込むこと、掻き集めることそして、四方に趨り廻ることが、人の習性となつて、運命となつて、大體の歸趨となつて居る。

基督の教訓は、それを(一)誓つてさうすな、それは間違つて居る(二)皆は天に在ます父の許に歸り集まるべきであると、呼びかけ給ふたことになつて居る、人は、散らばらんとして居るのに、基督は集まれと命じ給ふたのである。則ち、簡閱點呼司令官の如き位地であり、そんな態度であつた。

その時、吾等人類は神といふことを知らなかつた、神や佛といふ如き慈性のお方が此の世に在られるものかと思ふてゐた、それ故、基督の折角の召集にも應じなかつた。

けれども、基督は、心を盡くし、心ばせを盡くして、吾等を神の下に還らせんと努力し給ふた。

今すでに來れり、

父は斯の如く拜する者を求め給ふ(約翰傳第四章)

天にまします、父なる神は、吾等人類が神の子供として、父なる神を拜せんことを求め給ふ基督は父の旨を能く知つてゐられる、それ故に、何うかして、その如く爲らしめんとして、爲し得る限りを爲し給ふた、然しながら意の如くならない、其のならないところに、また更に奥

深い神の經綸があつて、基督は十字架にかゝり、無残の最後を遂げ給ふた、それは、吾等から見れば、無残の最後であつたけれど、基督から思はるれば、前定された約束の死、かゞやく光榮の死、平然として十字架にのぼり、いよゝ最後の息を引く瞬間にも、尙その使命の責任、救ひの道、贖ひの務めのことを思ふて忘れず、側に悔みて嘆きつゝある泥棒を顧みて

今日、汝は我と共にパラダイスに在るべし

と教へ給ふた、基督の生涯は何處までも教訓の生涯、啓示の生涯であつた、人々を父の許につれ往かんとして、その召集、執り成しに、救済の餘念のない生活であられた、何うしても吾等と異なつた生活であつた。

三

基督の弟子となるには、面倒の手續きは要しなかつた、孔子は束脩を拂ふてから後教へ給ふたが、基督には、そんな手續きも、儀禮も、皆無用で、誰でもあれ、基督にさはらんと希ふ者は、皆、さはることが出来、そして、直ぐ弟子となることが出来、救はるゝ者の數に加へられた、それ故に、基督の往き給ふところには、群集が群集した。

が、基督は、注意深く選擇をそれらの間に加へられたのである、決して、無下に、玉石混淆、何等の區別なく呼び寄せ給ふたのでなかつた、勿論、群集は群集である、それで宜しかつたのであらうけれど、弟子達には十二人の弟子があり、七十人の弟子があり、それゝ選擇して指導せられ、向きゝの使命を命じ給ふたのである、私は、その注意が頗る深かつたものであることを思ふ。

約翰傳第十五章、基督將に世を去らんとして、懇切に後半を語り給へるときの訓へである。

汝等、我を選びしにあらす

我、汝等を選べり

これは、必ずさうであつたこと、確かにさうであつたことと私は信する、それだけ、銘々に選ばれた特殊の意味も、總體としての意味もあつたのである、或る時、基督は、その弟子達に向ひ

汝等は我を誰と言ふか

と問はれ、その中の先輩格シモンペテロは

汝はキリスト、活ける神の子なり

と答へた、基督はこれを賞讃され

バルヨナ、シモン、汝は幸福なり、汝にこれを示したるは血肉にあらず、天にいます我が父なり

と言ひ給ふた、されば、人の語が即ち神の語となるのである、なる時があるのである「天に口なし人をして言はしむ」、 $\text{G}=\text{神}$ は人をもて語り給ふのである、そして、この時、基督は、彼れペテロに言ひ給ふた、

我はまた汝に告ぐ

汝はペテロなり

我れ、この磐の上に我が教會を建てん、

己れ天國の鍵を汝に與へん

凡そ汝が地にて繋ぐところは

天にても繋ぎ

地にて解くところは

天にても解くなり、と、

これは、何といふ大きな約束であつたらう、私はこれを天地間唯一の大きな約束であつたらうと思ふ、それが、基督と弟子との間に直接に行はれたのである、弟子から基督を選んだのである、基督が弟子を選び給ふたのである、天地を貫ぬく大きな理想と目的、經綸と精神とが此の中に存してゐた。

そして、思ふ、基督の弟子に示し給ふた數々は、こゝに、軌軸が存したのでないか、基督教の傳道の一翼はこゝから起つて居るのである、しかも一翼とは私の言ふところ、彼等から言へば、基督教の道統は獨りこゝに存す、羅馬がその儼然たる本據であると申すのでないか、そして、斯の如きものは、孔子の説教には全くなかつた、基督の教への絶倫な所以であらう。

四

尙、基督の弟子となつた者には著るしい變化があつた、これを新生といふか、若くば更生といふか、昨日に變る今日の新しい生命である、その豁然たる襲來である、それは全く、豫想す

ることも、夢想することもでき得なかつた、境地である、何うしても、それには、瑤光の環照といふか、天籟の靈覺といふか、世の常ならぬ突然の刺激、理智の上なる、覺發が伴ふてゐた、大なれ、小なれ、基督に従つた者には斯の種の觸發、感激があつたのである。

その最も顯著な經驗をした者がパウロであつたらう、

パウロは、基督の弟子達を、力のあらん限り、恐喝し、壓迫してゐた者である、一日ダマスコに近づいたとき、忽ち天來の光りに照されて、倒れ、且、

サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか

との聲を聞いた、彼は、見えない、地に倒れて目が眩んでゐたのである、そこで

主よ、汝は誰かと問ふた、

答へは、意外、

己れは汝が迫害するイエスなり

とあつた、のみならず、

起ちて町に往け、汝の爲すべきことを告げらるべし

とあつた、復た意外

パウロは起つたけれど見えない、他人の手に引かれてダマスコに入つた、が、

三日の間は全く見えなかつた、また飲食も出来なかつた

意外／＼といふも亦愚かである。

こゝに、アナニヤといふ人がゐた、基督の弟子である、彼は、幻影のうちに

往いてサウロといふタルソ人を尋ねよ（サウロの居る町、所を示して）

と告げられた、彼は躊躇した、パウロの平生の行跡、殊に、今回の旅行の目的を熟知するからである、しかるに、

往け、この人は、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に、我が名を持ちゆく我が選びの器なり

と告げられた、

彼は尋ね往いて、兩人は疑念なく會晤した、その時

パウロの目より鱗のごときもの落ちて見ることを得、直にバプテスマを受け、かつ食事し

て力づいた

となつて居る、實に、驚くべき覺發、更生、變化、史上無比のことであつた、そして、所謂基督教の力ある、實のある傳道は彼の此の時から始まつた、彼こそは、基督教傳道の中心の使徒であつたと謂はるべき、事蹟を史上に貽したのである。

孔子の弟子には、この種の覺發の經驗者はなかつた、それは必要がなかつたのである、小學から中學へ、中學から大學へと、年々の練習をかさねて、次第々々に進んで行く彼等の境遇であり、學問であるからは、基督の弟子達の如く學問思辯の力に由らずして、一時の觸發に由る猛烈なる變化と急激なる飛躍と開悟の類は、共にその必要がなかつたのである。

五

更に基督の弟子達は、多く漁人であつた、漁人たちは、いづこも、無學の者である、無知識の者である、また知識慾の至つて乏しい者である、彼等も概してその手合であつた、然るに基督は彼等に命じて言ひ給ふた、

我について來れ汝等をして人を漁る者とならしめん

と、奇態千萬のこと、世の無學の手合を以て、世の歴々たる有學の人を漁らしめんとし給ふのである、孔子も亦人を漁ることを一生の事業とせられたものであるが、その目ざす相手は時の王者であつた。それ故に弟子達に學問を深く仕込まれた、學問練達の士でなければ、王者たちを漁り得られないからである、基督はその王者を目ざしなかつた、然しながら、智者も、學者も、論客をも籠めて、廣く民衆一般を一人も残らず教化せんとせられたのである。しかるにその使徒たる者は學者たることを要しない、學問、知術、辯才、有徳の人たることを要しない。漁夫原の無學の手合にして足るぞと言はれたところ、實に、その往き方は、斯の世の往き方と離れてゐた、斯の世の方法と連絡のない、縦横、無頓着のものであつた。

それでも、弟子達は、歸り來つて、欣々として報告した。

主よ、汝の名によりて惡鬼すらも我等に服したり。

彼等は、世の常ならぬ成功者となつたのである、その初め、彼等の出で立つとき、基督は、ねんごろに言はれた

帯のなかに金、銀または錢をもつな

旅の囊も、二枚の下衣も、鞋も、杖ももつな

何れの町、何れの村に入るとも、その中に相應はしきものを尋ね出して、立ち去るまでは其處に留まれ

人の家に入りたらば平安を祈れ

労働人のその食物を得るは相應しきなり

斯くて、一錢も持たず、手ぶらにして立ち出でた彼等は、疲れず、饑ゑず、苦しまず、息災にして、健全にして、感謝の中に凱歌を奏して歸り來つたのである。

斯の如きこと、三千人の弟子を導かれた孔子は曾て夢みられたことがあつたであらうか、全く豫想されなかつたであらう、斯の如き場合が、人の世に有り得べしとは孔子及び其の徒のみならず、所謂常識論者の、理念に絶するのである。

現に孔子が陳蔡に餓へられたとき、子路は、忿々として怒り、君子も亦餓ゆるかと、孔子に喰つてかゝつたことがある。孔子は、自若として、君子も亦時あつて餓ゆると、答へられたことがある、その通り、君子といへども、時に餓ゆるのである、それが世の常の習ひである。が

基督の弟子達は、一錢を懐ろにせずして立つて、しかも一點の不安らしい顔つきをせず、長途の旅路にのぼつた。尙、未熟であつたらう筈のその教へを、さも／＼確信に充つる者の如く説いて弘めた、基督が斯くせよと教へ給ふたのである、勵まし給ふたのである。そして、その如く成功したのである。宗教といふは異なるもの、世の常の、學問、知術、機構、辯才の類を何も必要としないのである。

若し孔子をして、面あたり、基督の弟子達の此の光景を目撃せしめたら、自己の多年の教養、苦心慘愴の跡にくらべて、感慨果して如何であられたものだらう。

六

基督と父なる神とは、常に一であり給ふた、一であると自ら言ひ給ふた。これに由つて、演ずことを言ふ者だと咎められ給ふたのである。私は、基督の十字架の刑は、この演ずことを言はれた者といふことに由つて決せられたものと解して居る。世の中には、かゝる言葉の解し方から起る、誹りと、非難と、反目とが尠くない、基督が、最後に、大祭司の前に立たれたとき、(或は云ふ法廷に)大祭司は言ふた。

この人々の言ひ立つる證據に汝は何も答へぬか

基督は、黙して何も答へられなかつた

大祭司は、屹となつてまた言ふた

われ汝に命ず、活ける神に誓ひて我等に告げよ、汝はキリスト神の子なるか

この嚴格なる問ひに對して、基督は、明白に答へられた

汝の言へる如し

そこで、大祭司は、憤恨して、おのれの衣をひき裂きながら

かれ演言をいへり、何ぞ他の證言を求めん

と叫んで、死刑を宣告したのである、十字架にかけたのである。

基督は、法廷に於て、斯く言ひ、斯く決せらるゝの前、弟子達に對しては、別に、ねんごろにこのことを語り聞かされた。

汝等もし我を知りたらば、我父をも知りしならん、

今より汝等之を知る、既に之を見たり、ピリポ言ふ、主よ父を我等に示し給へ。さらば足

れり

基督言ひ給ふ、ピリポ、我れ斯く久しく汝等と偕に居りしに、我を知らぬか、我を見し者

は父を見しなり、如何なれば「我等に父を示せ」と言ふか、我の父に居り、父の我に居給

ふことを信ぜぬか

すべて父の有ち給ふものは我ものなり

(約翰傳第十四章、十六章)

斯の如く、基督と神とは一、その間には、差等がなく、一寸の間隔もなかつた、基督は、さら／＼と、平氣に、斯く言はれたのであるが、孔子には、固よりこの自信がなかつた、それよりも、遂に謙退して、

信じて古へを好み

窃に我が老彭に比す

とさして名も知られなかつた昔の學者か役人風情の者に比して、恥づる所を知らず、落ちついて、不斷の勉強をつゞけられたのである。孔子にはこの謙遜と悠容を取るのであるが、基督の

位地は、何うしても古今獨歩、東西特絶であられた、特絶であられたといふの他ない、神と己れを齊しふせられたのである、その境地は、自づから天下無類であるからである。

第十四 仁と忠と恕

道と眞理と生命

一

儒、基督と孔子の教へは、吾等、後學者に取つて、簡単に、何う集約することが出来るであらうか、これは、難かしい問ひにしても、亦、思ふて見なければならぬ要點である。

この標題に擧げた、仁と、忠と、恕とは、蓋それであるまいか、それは孔子の教へである。道と、眞理と、生命は、また蓋、それであるまいか、それは基督の示されたところである。

基督の弟子も、孔子の弟子も、各これに達せんことを希ふて、至誠をつくしたのである、基督の道は覺發である、ある機會に觸れて、突如として、一瞬の間に、體得することを要領とする、彼れ十二の弟子達は多くこれを得た、その他そこに參し得た者は多かつた、孔子の道は學

修して、序を踏んで次々にたどるのであるから、これを得た者は多くなかつた、多くの弟子達は、つとめて、もがいて、心配に堪へなかつた形がある。

私ども、いづれにか、さうしなければならぬ、手ぶらにして、自ら棄てゝゐては、何日まで經つても出来る時はない筈である。

二

孔子の仁は則ち二人の人と書いてある、故に、二人以上の間に在るべき心得方である、その常法である、常理である、それを仁といふのである。

人間は、誰でも、一人で住むものでない、誰も、彼も、二人か、二人以上で住むことに定まつて居る。

その最も近い者が、夫婦であり、親子であり、兄弟であり、姉妹である。推して、近所合壁の交りから、各地の親戚朋友に及ぶ。

その人達の間に處する各自の心得方を、仁といふのであるとすれば、仁とは、格別、難かしいものでないやうである。それが、難かしいやうでは、夫婦、親子、兄弟、朋友の日常の間に

は行はれにくい。

そこで、孔子が

仁遠からんや、我れ仁を欲すれば、こゝに仁至る

と、それを間近く、手の先き、足の先きに在るものゝやうに説かれたのは、感謝に堪へない次第である、吾等は、それに由つて何れだけ勵まされたかも知れない。

基督は、馳せ集まる崇拜者に向つて

汝の信仰、汝を救へり、安然にして往け

と申された、そして

凡そ、勞する者、重荷を負ふ者は、われに來れ

われ、汝等を休ません

わが輓は易く、わが荷は輕ければなり

とも言はれた、この邊のこと、兩者の教へは、たしかに、難かしいものではないやうに親はれるのである、親しみ易く、入り易いものゝやうに察せられるのである。

三

が、孔子の弟子達は、前に述べた如く、これに就て甚だもがいた。

例へば、或人が孔子に問ふた、子路は仁を心得た人であらうかと、孔子は答へて

知らないといはれた、註する者は、仁に至る場合もあらうが、至らない場合もある、未だ

たしかでないといふて居る。

或人は推し返して又問ふた、そこで、孔子は、はつきり曰はれた

子路は、千乗の國の賦を治めしむることは出来るが、其の仁はいかゞであらう、孔子は、

これを知らない

そこで、或人は、再求は何うであらうと、他の弟子のことを問ふたところ、孔子は

千寶の邑、百乗の家の、宰たらしむることは、求に能くできる、が、其の仁は知らない

と答へられた、そこで、或人は、更に赤は——公西といふ姓のもの——何うでせうと問ふたら

孔子はこれに答へて、

赤は、束帶して朝に立たせて、賓客ともの言はしむること——應對せしむること——は出

来る、が、その仁は知らない

曰はれた、三人とも、皆、落第者といつた格、仁はなかく容易なものでない。
別の人が、更に孔子に問うた

子文は三たび仕へて令尹——上卿——となつたけれど、喜んだ色がなかつた、三たび己め
られたけれど失望した、憤恨したらしい色もなかつた。

そして、その管掌の事務は整然よく引次いだ、此の人は何うでせうかと

孔子は曰はれた、忠なり

そこで、其の人は更に問うた。

仁の人と謂へやうかと

孔子は曰はれた

未だ知らず、焉んぞ仁を得ん（仁の人といふには距離があり相だ）

崔子といふものがあつて、齊の君を殺した、陳文子といふものは、そこに、馬四十疋の祿を食
んでゐた者であるが、この亂を見て、その祿を投げ棄て、他邦に去つた。

他邦でも亦崔子と同じ様な人が要地に當つてゐたので、そこをも去つた。

また往つた邦でも、やはり、崔子のやうな人が、要地を占めて居たので、また去つた。

そこで、この陳文子は何うでせうと孔子に問ふたところ、孔子は

清し

汚れない人だと答へられた、そこで

仁の人でせうか

と重ねて問ふたら、

未だ知らず、焉んぞ仁を得ん

とまた／＼否認せられた

して見れば、忠義満心の人であつても、未だ必ずしも仁者とは謂はれないのである、清廉潔
白の人であつても、未だ必ずしも仁の人とは謂はれないのである。

仁の人たることは頗る難いものである。

四

さらば、仁とは、これを、真正面から説いたら、何んなことになるものであらうか、

顔淵は、改めて記するまでもなく孔門の一の弟子である、その顔淵が仁を問ふた

孔子の曰く

己れに克つて禮に復へるを仁と爲す。

註する者は、曰く己れとは身の私欲をいふ、これに克つとは、これを拂ひつくして、少しも残さざる義なり、禮は天文の節文である、これに復へるとは、もとの如くたちかへる義なり。

必ず能く己れが私欲に克つて、禮に復へる時は、其の行ふこと皆理にかなひて、本心の徳、天然のまゝに、我に全し、これ則ち仁なり（仁になりたる時の意味）

仁とは斯の如きものである、孔子は、これに附け加へて

仁を爲すのは己れに由ることである、人に由らんや（人に由ることでない）

と曰はれた、この己れは、前の己れ、己れに克つべきの己れとは異なる、自らといふ意、我といふ意、自ら我が力を用うるに由つて達し得ることであつて、他人の力に由るものでないと、

その理を明かにし、勵まされたのである。

そこで、顔淵は、その内容は何んでありませう、その綱目を聞かせて下さいと迫つたところ、

禮に非ざれば視るなかれ

禮に非ざれば聽くなかれ

禮に非ざれば言ふなかれ

禮に非ざれば動くなかれ

と、仁は則ち禮である、禮のあるところに仁がある、禮を離れて仁はないと、孔子は教へられたのである。

顔淵はこれを承つて、私は不敏でありますけれど、生涯斯の語を勉め勵みませうと答へた。

私どももこれを勵まねばならないのである、然し、顔淵は申した

之を仰げばいよ／＼高し

之をきればいよ／＼堅し

孔子の道には、顔淵の亞聖を以てするも、尙そのやうに感ずる高いところ、堅いところがある